

---

# 何も悪い事してないのに天罰喰らった

ぽんきち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何も悪い事してないのに天罰喰らった

### 【Nコード】

N0938W

### 【作者名】

ぼんきち

### 【あらすじ】

前回までのあらすじ

じめじめした所でキノコ採り

バツ○マンが出てきてさあ大変！！

私にあらすじを書く才能はありません

## 事情説明（前書き）

戦闘でのグロ表現を結構頻繁に書くかもしれませんが。

## 事情説明

5月20日 晴れ 深夜 とあるボロアパートの一室が燃えていた。

俺の部屋だ。何故かアパートの真上の空に俺は浮かんでいる。手を上にかざすと月が手のひらをすかして見える。

もくもくと黒い煙を上げる自分の部屋を見下ろし、思いついた事を言葉にした。

「もしかして、俺死んだ？」

「はい、黒こげになって死にました。今も死体がジュージュー音を立てています」

自分以外の声があったので周りを見回すと、真後ろに若い女性が居た。彼女はOLのようにスーツをびしっときこなした20代前半の美女だった。

俺と同じ死んだ人？と一瞬思ったが彼女は透けていない。

てことは・・・

「あー、もしかしてお迎え？」

そう聞いた俺をちよつと不思議そうな目で見ながらうなずく。

「その通りです。貴方は死亡しました。今から天界に同行して貰います。

未練があっても、神に面会してからどうするか決めてもらいます。よろしいですね」

最後の言葉が同意を求めるものではなく、決定事項を告げるものだった。

「はあ。別にかまいませんけど。未練なんて無いし。さっさと行きますか」

「・・・ここまで自分の死をあっさり受け入れる人は初めてです。かなり冷静ですし。」

まあ私は早く終わるので助かりますが。では私の手に掴まってください」

そう言って手を差し伸べてきた。素直にその手を掴む。ひんやりとして気持ちいいなあ、などと思った

瞬間、目が眩むような強烈な白い光が彼女の後ろから発せられる。俺は眩しくて顔を横に背けた。

「謁見の間に直に飛びます。一瞬です。では、行きます」

なにか呪文のようなものを彼女がつぶやくと、光りが一層強くなり、体がフワツと軽くなった気がした。

光りが収まり、俺はゆっくり目を開ける。すると、先ほどのアパート上空ではなく教会のような場所に

移動していた。教会といってもあの長い机や椅子が一つもなく、がらんとしていた。

床や柱が真っ白な大理石で出来ており、鏡のようにピカピカだ。広さは学校の体育館ほどの面積はあるだろう。天井は低い。3メートルくらいか。

キョロキョロと見渡しているとある事に気付いた。先ほどの女性が居ない。

代わりに目の前にスウーッと金髪のおっさんが出現した。170cmの自分よりもさらに5〜60cm

高いムキムキマッチョなおっさんだった。

そんなおっさんがリクルートスーツを着ていた。もうパツツンパツツンだ。今にもボタンが飛んできそうな位に。滅茶苦茶似合っていない。しかし、神と聞いているので失礼な事を言わないようにする。

だだっ広い空間の真ん中で無言で見つめ合う大男と俺。こほん、と大男が咳払いするところだった。

「私が神だ。今から君の魂の行方を決める者だ。君は咲陽一 さき よういち だな。通常は私が直に説明する事はないのだが、今回は特殊な例ゆえに私が直接出向いた。ここままで何か質問は？」

いきなり聞かれたので少し慌てたが、せつかなので確認をしておきたい。

「じゃあ、俺は死んだんですね」

「うむ。お前たちの時間でいうと5分ほど前に死んだ」

「原因はなんですか？火事なのは分かるんですけど、火元に心当たりが全く・・・」

「火事ではなく、落雷による感電死だ」

「うわ、運悪すぎ・・・特殊な例とは？」

今まで即答していた神が言い淀んだ。

「うむ、どこから説明しようか。」

どこから出したのか、両手に椅子を出現させ、一つを俺に手渡し、自分はさっさとそれに座ってしまった。俺もそれに習い、少し重めの木製のシンプルな椅子を降ろし、おっかなびっくり腰かける。

「私の部下に、下界、すなわちお前たちの住む星の天候を操る神が居るのだが、そ奴から報告があった

。他の世界から無理矢理、門を開き、渡ってきた者が居ると。この門というのは、本来交わるはずの

ない平行世界と別の世界を繋げてしまつトンネルのようなものなのだ。門は神々しか使えないはずなのだが、禁忌とされる魔術を使い、この地球に来てしまった。しかし、本来居るはずのない人物が突如入り

込むと、世界は拒絶する。排除しようと国一つ潰れかねない自然現象が発生したりもする。

それを避けるため、私は異世界から来た者に天罰を与えた。しかし少々てこずつた。人の身でありながら門を開いたのだ。神に近き力を持っていた。しかし所詮人の身。幾度も神の雷を受け、消滅した。

しかし、最後に放つた天罰の余波が勢い余つて下界にも降り注いでしまった。それが運悪く、君の居る

場所に落ちた、と言うわけなのだ。理解できたか？」

俺は口をポカーンとさせて、絶句していた。異世界からどうのこうのはすぐには理解できないが、

なんとなく分かった。しかし、神の放つた天罰が全く関係ない俺に偶然落ちた。そして死亡。

さっきまであきらめて、達観して、来世とかあんのかなあとか、あるとしたらもうちょっと楽しい人生

がいいなあとか思ってた自分がどこかにいった。

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああああ  
ああああ!」



## 老人（前書き）

まだ冒険に行きません。修行編ですかね

## 老人

椅子の上で頭を抱えて絶叫する俺を神が申し訳なさそうに覗きこみ、頭を下げた。

「本当に申し訳ない。あんなに力を出すのは久方ぶりで加減を間違えた。それでも余波だから百分の一程度なのじゃが、人間は脆いな。いや、それはともかく、君の来世をどうするかだ」

「え？生き返らせてくれないんですか？」

加減を間違えたという問題発言はともかく、手違いで死んだのだからてつきり生き返らせてくれるものだとおもったのだが。

「……出来ぬわけではないのだが、かなり面倒な事になるぞ？神のように崇められ、さまざま人間が群がり、信仰の対象になるだろうな。イエスやブッタのように。そして死んでから本当の神になるべく試練が襲い、本物の神になり、永遠に生きるようになる。君は神になりたいかね？」

「絶対に嫌です!!」

「ちよつとは迷うものなんだが……」

そんな面倒なことはごめんだ。

「わかった。今回の件、私に責任がある。詫びとってはなんだが、

別の世界に好条件で転生させよう。どのような世界がいい？」

ん？もしかしてすぐラッキーなのかもしれない。今までの生活ははつきり言ってつまらない。

日々の生活費を稼ぐために好きでもない仕事をがむしゃらにやっつて、貴重な休みはゲームして

終わる。彼女も、親しい友人もない。金の亡者の両親とは縁を切つて情などかけらもない。

本当に未練などない。世界を選ばせてくれるというのだから地球と全く違う世界もあるのだろう。今と同じような感じは却下。

未来系？頭悪いし、機械系統もダメだ却下。RPG系はどうだろう。ヨーロッパ風の。それならなんとかなりそうだ。

腕っ節だけで食っていくというのも悪くない。なによりRPGは好きだ。魔法も使ってみたい。

好条件というのはおそらく生まれつきの才能とかだろう。なんかわくわくしてきた。

さてどんな能力をつけてもらおうかな。

「ふむ、ちょうど門を介してやってきた者がそのような所だったな。よし、身体能力と魔術の素質、

幸運を高めて送ろうぞ。赤ん坊のまま送るとあぶないな。10歳ぐらいで送るとしよう」

「ちょ、ちょっとまってください。なんで考えてる事が分かるのかはいいとして、もうちょっと

選ばせてくださいよ！！」

「汝に祝福あれ。達者でな」



なにが幸運だバカ野郎。俺の真後ろにはバカでかいトカゲがいた。ただし羽が付いてる。

口から炎がチロチロと漏れている。

「なんで着いて早々ラスボス!？」

ドラゴンだよあれ、はじまりの地からさっそくラスボス出ちゃったよ。とんだクソゲー掴まされたよ!

などと文句を言いながら木々の合間を全力疾走する。ドラゴンは窮屈そうに羽をたたみ、大きな頭を

前に突き出し、前傾姿勢で木をなぎ倒しながら俺を追ってくる。

スピードなら自分の方が早い。だが相手の歩幅が広すぎる。どんどん距離が縮まっている気がする。

いずれ追いつかれる。そう思うと背中に嫌な汗が出た。たまらず後ろを振り返ると巨大な口をガバツと

広げ、頭から喰らおうとする瞬間だった。

あ、俺ここで死ぬのかな と思った瞬間。

自分の頭スレスレを何かがかすめながら通り過ぎた。

その何かはドラゴンの口の中に吸い込まれ、ドゴツっという鈍い音を響かせた。

ガアツツ!ガツツ!ガボツツ!!

ドラゴンは盛大にむせて、ボトつと何かを吐き出す。岩だった。

人の頭より二周りほど大きなゴツゴツした岩。誰が投げたんだろうと前に視線を戻すとすぐ目の前に

老人が立っていた。自分より少し背が低く、決して筋骨隆々という感じではない。60歳位だろうか。

手には青白く光る両刃の剣が握られている。

「子供がなぜこんな山奥におるんじゃ？まあいいわい、ちょっと下がっておれ」

そういつてなんの気負いもなく、ドラゴンの前へ出る。一瞬、ドラゴンの目が怯えたように見えたのは気のせいか。俺は30メートル程離れ、木に身を隠しながら様子を見る。

「火竜がこんな所に来るとは珍しい。悪いが森を焼かれるのは困るのでな。殺らせてもらおう」

老人は半身になり、左足を前に、右足を後ろに。剣は右肩に担ぐように構えた。

ドラゴンは歯をむき出しにして後ろに首を下げた。恐らく勢いをつけて噛みつくためだろう。

一瞬のこう着状態から、ドラゴンが動く。口を大きく開け、叩きつけるように老人に噛みつく。

尋常な早さではない。またたく間に老人に牙が刺さった、と思った瞬間。

老人の体が右にブレた。

俺に見えたのはそこまでで、後はポトツと落ちるドラゴンの首と、そのすぐ右脇で剣をいつの間にか腰の鞘に納めた老人。

俺は固まっていた。ドラゴンに対する恐怖など微塵もない。

超高速の剣を見せられ、興奮している。

なんだよあれ、すげえカッコいい！！俺もやってみたい！！

俺はこの世界で楽しく暮らしたい。やりたいと思った事は我慢しな

い。それにここは日本じゃない。

自分の身は自分で守る。ならあのドラゴンすら一撃で屠る剣技（魔法なのか？）はうってつけだ。

なにがなんでも弟子にしてみらおう。

「ふう。老体にはなかなかこたえるわい。おい小僧もつだいじよ、  
おお？」

俺はなにか言ってる老人のもとに3秒ほどで駆け戻り、勢いそのままズザザーっと土下座した。

「俺を弟子にしてください！！どんなことでもやります！！！」

「なんじゃいきなり。まあでも素養はありそうじゃの。時間もかかるし、鍛錬もきつい、耐えても  
身に付かないかもしれん。それでもいいか？」

「全然問題なし！！がんばります！！おなしゃーっす！！！」

俺はすぐに後悔することになる。

## 修行

老人の名前はエスクと言うらしい。白髪頭を短く刈り込んでいて、きびきびしており、眼光がすごい。

歳を聞くと多分70前半だという。50を超えてから数えていないらしい。

初老だと思ってたからびっくり。

しゃべると見た目に反しておっとりした感じの人なので安心した。

弟子入りしたからには素性を話したかったが、神様に殺されて転生しちゃった。なんていったら

おかしい目で見られるため、記憶喪失を装った。

「ま、別にええわい。わしもちょうど継承者を探そうかと思っておつてな。

お前さんには才がある。時代遅れの技だが、誰かに継いでほしいのじゃよ」

記憶喪失に関してはおそらく信じてないだろうが、そう言ってくれた。

改めて頭を下げ、お世話になりますとあいさつをした。

まず覚えることは食糧確保と火の起こし方だった。

だってエスクじいさん森の中に家立ててるんだもん！！

夜はバカでかい鳥が飛んでるらしく、餌になりたくなければ外に出るなどありがたい忠告をいただいた。なんで村に住まないのかと疑問に思ったが、仙人みたいな人なのだと思う事にした。

まあ、がんばりますか。楽しまなきゃ損だ。

「エ、エスクじいさん・・・もう無理、死ぬ・・・オエエエ」

「なんじゃ情けない。まだ8時間しか走つとらんぞ」

俺は森の外縁部の獣道で四つん這いになり、盛大にゲロを吐いていた。

今日も体力強化の訓練のだが、いきなり40キロはありそうな石を背中に乗せられ、そのまま森をランニングさせられている。ここまではまあ百歩譲っていいとしてしよう。

神から身体能力強化を施されているため、10歳の子供にもかかわらず、重荷を背負って森を全力

疾走出来た。元の世界の俺より早いんじゃないだろうか。

しかし

「うむ。さすがじゃの。では、今から夕飯まで休まず走るんじゃ。速度は限界の半分でいい」

「死ぬわ!!」

まだ日が沈む前に叩き起こされ、今の今までノンストップで走り続けていた。

今は昼ごろだろうか。足は痙攣していて、心臓は爆発寸前、吐き気がおさまらない。限界だ。

「ふむ。まあ初めてやって8時間は脅威的じゃの。10時間走り続けることが出来れば基礎体力作りは終わりじゃ。ヨウイチはガーネット流始まって以来最高の逸材じゃよ」

「な、ならもうちょっと大事に・・・」

「何を言う。中途半端なものを教える気はないぞ。後30分走れば今日はおわりじゃ。ほれほれ」

さすがに夕飯までというのは冗談だったらしい。ああ辛い。ただと悪くない。こっちに來てから体を鍛えることが楽しくて仕方ない。決して無意味なしごきではないし。

持っていた木の水筒から生ぬるい水で口をゆすいで、また走りだす。

弟子入りして最初の3カ月は生活していくための技術を教えてもらった。

エスクジいさんに今までどうやって暮らしていたのかなどと聞かれると思っていたのだが、ただ黙って火の起こし方をゆっくりとやりながら教えてくれた。いい人だった。

食べられる木の実やキノコの判別や、狩りの仕方、獲った獲物のさばきかた、簡単な料理、洗濯等々

を教えてもらい、エスクじいさんと一緒に暮らす中で覚えていった。夜にこちらの世界の常識や最低限のマナー、文字の勉強（カタカナによく似ていたので覚えやすい）を勉強した。

エスクじいさんに遠慮なく色んな事を聞いた結果、地球によく似た世界なのが分かった。

まず言葉だが少なくとも日本の言葉ではないらしい。エスク爺さんの唇の動きと、俺の耳に聞こえる日本語の音が全く合っていない。これがなかったら一から覚えるようだった。

しかし文字に関しては日本のカタカナに酷似しており、文法も日本のものと大差なかった。他の国に行けば違う言葉や文字があるらしいが、これが一般的なので覚える必要はないという。

時間は一日25時間で、時計は普及していない。一般的には昼前、夕飯前などの大雑把な感覚

らしい。エスク老人は元軍人だったらしく、一時間単位での時間感覚があるようだ。

さらに30分、15分までいくと政治に忙しい貴族か、莫大な富を操る大商人位らしい。

エスク老人に秒やコンマといった概念を聞いてみると、もうそれは高度な学問になってしまふとのことだった。

生き物や植物などは竜（ドラゴンとは言わないらしい）などといった魔物以外は地球と変わらなかった。平行世界というのがちょっと理解できた。これはいいことだ。食べるものはそんなに変わらなさそうで安心した。

この世界の知識と常識、最低限の生活力を身に付けた俺は3か月目にしてエスク老人から修行の開始を告げられる。

そして今、地獄のような基礎体力作りが始まった。早く剣振ってみてえ。

## 修行2（前書き）

ヨウイチの言葉は、聞き手の習得している言葉に変換されて聞こえるため、

コミュニケーションはスムーズに出来ます。

## 修行 2

エスクじいさんに弟子入りしてから早一年立っていた。日本と同じように春夏秋冬があるらしく、

冬はあまりの寒さに家の中で凍死ホロホロのログハウス思ったが、

なんとか乗り越えた。今は地球でいうと2月ごろだろうか。日にちの概念がないので何日目かは

早々に数えなくなった。そんな余裕はなかったというのが正しいか。基礎体力作りは6カ月で終わり、次の段階に移っていた。

「これほど早く終わるとはのう。普通は基礎体力作るだけで最低4年かかるもんじゃが、異常じゃな。しかしどうしたもののか」

なにかいけなかったらうか？ちょっと不安になった。それを俺の顔を見て苦笑を浮かべるエスクじいさん。

「なに。大体、10歳から始めて、15になったら体を作り、17位で剣術を学び始める。

別に無意味に時間をかけているわけではなく、人間の成長に合わせてものなんじゃよ。

何が言いたいか分かるか？」

俺はこくんとうなずいた。エスク老人はそんな俺を見て満足したのかイスの上に胡坐をかき腕を組み

をして目を瞑ってしまった。彼の考え事をする時のクセだった。次の修行の説明をするから家に居る

と早朝に言われたので、朝食を食べてからこの会話が始まった。



「今日は調子がいいの。あと3時間はできるの」

俺はその言葉にうんざりした。毎日毎日毎日気を失うまで魔力を体の表面にまとわせ続け、葉っぱの上に座り、浮いた状態を保つという修行をこなしていた。

体内の魔力の流れを感じるようになるまで一カ月（一日中瞑想）  
流れをコントロール出来るようになるまで一年（一日中瞑想ただし水中）

魔力切れでぶっ倒れるまで浮かび、魔力の底上げとさらなるコントロール強化 今ここ！！

体を動かしていないのに疲労感がすごい。体の芯から疲れきって指一本動かすことすら苦痛になるのだ、この修行。

魔力というのはどうやらこの世界では誰でも持っているらしいが、ほとんどの人は使う事はあまりないらしい。魔法を使うものや、ごく一部の武術を使うものが鍛えて操作するのだそうだ。

それでも自分は魔力操作の覚えがとんでもなく早いらしい。しかし辛い。あの地獄ランニングのほうがましかもしれん。体力は休めば少しは回復する。

しかし魔力は違う。一日しっかり休んで6、7割といったところか。その状態でまた魔力が0になるまで使うのだから毎日クタクタだ。

ああ、早く剣を振りたい。

## 修行2（後書き）

魔力や魔法の話しは別の機会に。長くなりそう。

文字多くて見づらい物語ですがよろしくおねがいます。

なにも考えずに行きあたりばったりに書いてますが、ちゃんと終わらせる

ようにします。

### 修行3

葉っぱの上でぶかぶかはあれから2年続き、俺は13歳になった。ようやくそれが終わり、肉体作りに入るのかと思ったのだが、

「うむ。やはり早々と会得してしまったな。お主の成長具合だと、1年半ほど待つようじゃ・・・」

よし、次は魔法を教えよう。と言っても、わしは初級の魔法しか知らんから大したものは教えられんが覚えておいて損はないじゃろ。しかし・・・お主はすぐ覚えてしまっからの。

もう一つ何か・・・体術を前倒しするか。型をなぞる位はいいじゃろ。ガーネット流の体術は使えるぞ

。極めれば重装備の者も一撃で倒れるからの」

「・・・どうせまた死一步手前をウロウロするような修行が始まるんだ!!」

騙されませんよ!!」

「・・・今回は大丈夫じゃよ。魔法はおまけみたいなもんじゃ。体術は予習じゃ。

本番は文字通り血反吐まき散らしながら転げまわるかの。ハッハッハ」

「笑いながらさらつとやばい事いつてる」

魔法に関しては6カ月ほどで初級魔法の<sup>フレアサンドアーム</sup>燃烧土竜風切り（カッタ

ウォール）防壁の4つを覚えた。だが、思わぬ事が判明した。

どうやら魔法の適正があまりないらしい。といっても、魔術の素質はあった。神に与えられた素質が。しかししよっぱなから体内魔力循環ばかりを尋常じゃないほど繰り返したため、魔法を使う時に重要な体の外に集めるといふ事が苦手な構造に俺の体はなってしまうらしい。

そうエスクジいさんに説明された。ほんのちよつとシヨックだったけど、あの剣技を習得するためには重要な事なのだろうからしょうがない。それに魔法の訓練を先に行くと体内魔力循環が難しくなってしまうのだとか。まあ、全く出来ないわけではない。

体術は主に足さばきや転倒したときの対処方、そして素手で倒す技の型だった。

ガーネット流は掌底だった。体重移動の力と、相手の重量のすべてを一か所に集中させ、それを相手に余す事なく伝える技。見本だといって俺にその掌底をぶち込んだ師匠を今でも許せない。

初めて真横に吹っ飛ぶという経験を味わい、大木にしたたか背中をぶつけ、気を失った。

外ではなく内を破壊する技らしく内臓にダメージをおってしばらく飯がのどを通らなかった。

これ出来れば剣いらんのでは？と聞いたところ、

タイミングがシビアで集中力があるので多対一の戦場では使えない。それとあくまで対人用であり、魔物は耐久度が違いすぎるので剣でやった方早くて安全。なのであくまで補助らしい。

これには苦勞した。型は一周間ほどで覚えたので何回もおねがいして師匠に相手してもらい、極めるまでに一年かかった。普通は剣術と併用して早くても5年はかかるらしい。

組み手で師匠にガード越しだが掌底を打ち込み、足を浮かせた時はすごい嬉しかった。

そして15歳になった俺は、ついに竜を一撃で屠るガーネット流の剣術を学ぶ

### 修行3（後書き）

サーセン。昼とかいって

次の次には町にでます

絶対

じゃないとすすまねえ

## 修行4

「ガーネット流の剣術の基本は、重心移動の力と地面を蹴った時の反発力をすべて剣に乗せる。

腕の力など大したものではない。逆に邪魔じゃ。剣を正しい角度で保持する位の力で十分足りる。

これさえ学べば、剣技などおまけじゃ。最高の威力で最速の剣を何度でも瞬時に出せるようになる。

腕で振ればただの棒振りになり下がる。2回、3回振るにはいいだろう。格下相手なら十分通じる

かもしれない。が、しかしすぐに威力、速度が落ち、振れなくなる。

もう一度言う。腕の力は要らん。移動した力、前へと蹴りだす力、その時の地面の反発、それらを剣に伝えるための腕だ。わかったな」

「全然だめじゃ。動きがバラバラじゃ。一連の動きがちよっとでもずれると威力は半減する。

腕立て1000回じゃ」

「なんのために肉体改造と剣術を同時進行させたというのじゃ。

蹴りだす力が弱い。

坂道ダッシュ500本じゃ」

「なんじゃなんじゃそれは！！剣を受ける時は真っ向から受け止めるのではない！

7割受け流し、3割返す。何回めじゃまったく。腹筋3000回じゃ」

「剣に集中しすぎじゃ！！全体を俯瞰する感じを維持するんじゃ。

でない」と足元を狙われる」

「なつとらん。防御が終わってから反撃しては意味がない。攻防一体。受け流しながら次の動作をつなげるんじや。夜までに熊一頭倒してこい。それまで帰ってくるでない」

「遅い！！虫一匹捕らえられんぞそれでは。素振り1000回じや。」

「戦う時に地面が荒れていてもいつもどつりの足さばきが出来るようにせい。」

上を向いたまま湖まで歩け。一度でもつまずいたら最初からやり直しじや」

「痛いか。あたりまえじや。人に刃を向けるということは自分にも向けられるということじや。」

恐怖は当たり前。さっさと立たんか」

15歳になつて肉体改造（という名の体の酷使）を行ったが、筋骨隆々にするわけではなく。

必要な部分だけを肥大させ、邪魔になるところは持続力をきたえ、あとはひたすらバランス感覚

（おそらく体幹だと思つ）を鍛えるということだった。

なので細マッチョといった感じなのか師匠と似たような体型になった所で剣術指導が始まった。

肉体改造自体は半年でほぼ完成したので後は仕上げながら剣術を平行的に習っていく事になった。

異常なスピードで成長する俺を不思議がりながらも、まあええわ

いと言って流す師匠。

おかげで剣を握る機会が早まり喜んだが、やっぱりキツイ。地獄だ。なんと剣が体を裂いた事か。死にそうになった事も二度あった。まあ、二度とも自分の集中力不足で招いたことなのだが。

全身あざだらけ切り傷だらけになりながらひたすら師匠と刃を交える。

木刀など使わない。本番で木を使う奴なんていないからとの事。そんな死と隣合わせの修行をやって丸3年。ついに免許皆伝となる。

よくもここまで辿りついたもんじゃ。奇妙な縁だのう。事情は知らぬが、帰る所も頼る者もいなく、この世界を全く知らぬ子供が立派に剣士となった。最初はあまり期待していなかった。

初めて会った時、30メートルを凄まじい速度で森の中を駆け抜けた10歳の子供に衝撃を受けた。この子なら大成するのではと。しかしガーネット流は厳しい。どんなに才があるものでも基礎作りの時点でやめてしまう。それに耐えた者も、その技の難しさに途中で投げ出す。

まあものになればめっけもの、村には定期的に出向くが、人恋しいという事もあったのかも知れない

。しかし、予想を裏切り、ヨウイチはすごかった。身体能力の高さは予想していたよりもはるかに高く

、スタミナも常人離れしていた。何より根気がすごい。文句は言うが、必要な事だと理解し、決して手を抜く事はしない。精神面でも大人の気遣いを見せたりする。大きな力を手に入れると試したくなるがヨウイチは教えを守り、自分以外に試す事もない。本当に子供なのかと思う時もあった。

そして物覚えのよさ。これが抜きんでている。どんなに早くても10年はかかるはずのガーネット流をたった8年で会得してしまった。それも恐ろしく完璧な会得。今の状態でも大陸で5本の指に入るのではなからうか。これから世に出て経験を積み、一対一で勝てる者はいなくなってしまうだろう。

我が子がここまで成ったのだ。嬉しくないわけではないが、さびしくもあり、少し悔しくもある。剣士としての性が。

明日、ヨウイチはここを旅立つ。もう教えることはない・・・いや、一つだけある。

これはガーネット流の師匠としてではなく、剣を振ってきた一人の人間としての。

見送りの時に言おう。

となりでスヤスヤと寝るヨウイチは大きくなっていた。子供の成長は早い。もう立派な大人だ。

「おやすみじゃヨウイチ」

#### 修行4（後書き）

ああ長かった

そして夜とか言いながらももう載せた

早い分にはいいよね

剣術蘊蓄大好きだけど我慢しました

え？それでも長い？

知らんわ！！

## 旅立ち

この森を出ていく事を決めたのは割と早かった。エスクじいさんのもとに来て、8年。

大変だったけど楽しかった。でもこのままずっと居候するわけには行かない。

若いうちに見聞を広めるとも言われたし。だからといって寂しさはぬぐえない。

優しい人だった。厳しいけれど、それは全部自分を思つての事。理不尽な怒り方は絶対しなかった。

体調を崩して寝込んだ時は夜通し看病してくれた。前の世界では感じられなかった愛情というものを

注いでくれた。師匠であると同時に父親のようにも思っている。去りがたい。6日ほどかけて準備した旅用品も重く感じる。

自分で狩った獣の皮を麓の村で作ってもらった外套やリュック、革靴を装備し、荷物に不足が無いか

確認する。

今日の夜明けとともに出発し、朝には麓のムブラ村に到着し、世話になった人達に挨拶をしてから

カラド領を出て、エスケンス王国の首都オズマンに向かう。

窓の外の暗闇が若干明るく見え始めてきたのを見て、挨拶をしようとして物置きとなつてる部屋に行く。

エスクじいさんが昨日の夜から今まで、カンテラを照らしてゴソゴソと何かやっていた。

ドアを開けるとひと段落したのか木箱に腰を降ろし、タオルで顔を拭いていた。

「もう行くのか。早いの」

「・・・はい。お世話になりました」  
深々と頭を下げる俺を嬉しそうに見るエスクじいさん。

「ヨウイチに渡したい物があるんじゃない」  
そう言っただけで座っている木箱から立ち上がり、おもむろにその木箱のふたを開ける。

皮鎧だった。胴体だけを覆い、腕や肩の動きを阻害しないタイプのもの。

「年代物じゃが、水虎の皮膚を使い通気性を高め、中は妖精銀 スリル、外は大角牛の皮を使った  
オーダーメイドじゃ。そんじょそこの鉄鎧なんかよりずっと軽く  
て丈夫じゃ」

「い、いいんですか？貴重な物なんじゃ」

「わしには最早無用の長物、使っちゃってくれ」

「では、ありがたく使わせていただきます」

「うむ。それと、この剣をお主に」

木箱の横に寝かせられている長物を持ち上げ、俺に差し出した

「お主が修行で使っていた剣に、継続魔法を施した。まあ、大したものじゃないがの。」

刃の摩耗を防ぐ魔法じゃ。切れ味は持続するが、折れや曲がりには防げないので注意するんじゃない」

「そうか、最近夜遅くまで何かやっているのは知ってたけど、これのためだったのか。」

一か月に一度は、獲った獣の肉や毛皮を調味料と交換するためにムブラ村に行くのだが、たまたまナイフや農具を売りにきた商人と会話する機会があった。

名のある刀工が作ったものには継続魔法がかけられており、炎を纏ったり、遠くにいるものを攻撃

出来たりと、強力な力が宿っていると聞いた。

しかし、継続魔法のかかった武器は数が少なく、ほとんど世に出回らないらしい。

魔術師に頼もうにも、魔術師自体が珍しく、継続魔法は時間がかかるは難しいはあまりやりたがらない。やっても親しいものや、自分のためにしかやらない。なので運よく頼めてもとても高価なのだから

。渡された剣を見ると、確かに自分の剣だった。柄は両手でも片手でも握りやすい長さで太さ、

鐔の部分は無いといっていいほど小さい。ガーネット流は鐔競り合いをしないし、刀身を合わせることも

も極力しないため、不要なのだ。なので親指の半分程しかない小さな突起が左右に申し訳程度に着いている。これは鞘から剣を抜くとき、親指で押し上げて抜きやすくするためだ。

刀身は鈍銀色をしており、幅は35mmとこの世界の標準の剣より細いが、厚さが25mmと肉厚。

長さはちょっと短く70?で、ガーネット流に一番あったサイズらしい。

しかし、いつもと違った所が一か所。両刃の剣の真ん中に端から先まで文字が刻まれている。

両面にびっしりと。その文字は今まで見たことが無い字だった。

2カ月ほど前に突然予備の剣と交換されたのだが、このためだったのか。

大変だったろうに。

「あまりジロジロ見る出ない。本職ではないからの。見た目にこれほど腕はよくないぞ。  
さっさと鞘に収めんか」

「そんな。綺麗ですよこれ。ホントにありがとうございます」

「うむ、まあ、なんじゃ、大事に使え。それと、気をつけるんじゃぞ。無理は・・・死なない程度にな」

「・・・はい」

俺は黒い木の鞘に剣を納めると、師匠は別れの言葉を口にした。

「最後に・・・教えたいことがある」

「は、はい」

「いつか、人を殺める時が来る。これは剣を握る者の定めじゃ。強力な力を持つ者は、争いに巻き込まれる。争いが起きれば、死者は必ず出る。その時、もう嫌だと思ったら、剣を捨ててもいい。誰も責めたりはしない。聖職者になるなり、村人になるなり、なんだったらこの森に帰ってきてもよいぞ。」

それでも剣を捨てないのなら、覚えていて欲しい事がある」

汝の剣は誰かを殺める剣なれど、誰かを救うための剣であれ

「・・・綺麗事じゃ。ガーネット流の教えではなく、たかだか数十年生きただけの老人の言葉じゃ。しかし、綺麗事じゃなければ、剣を振う意味はなくなる。意味のない剣はただの暴力になり下がる。たった一つのものを守るために、エスクという人間が見出した答えじゃ。いつかお主が自分なりの答えを出す時が来るだろう。よければ、今の答えを支えにしてくれ。心が折れぬように、な」

「しかと、心に刻みました」

肌着の上に貰った皮鎧を装着（調整してくれてたらしい）し、リュックを背負い、剣を腰に差し、外套を着て外へ出る。

エスクじいさんは俺が家から出ると、大いびきをかいて寝始めた。

俺はいびきをBGMに育った家と森を後にした。

旅立ち（後書き）

やっと外に出た

次は今日の夜にでも載せます

## 護衛依頼

獣道を下り、森を出てからさらに一時間ほど歩くとムブラ村がある。

全員で100人ほどの村で、カラド領では2番目に大きい村らしい。俺はこの村しか見たことはないので本当かどうかは分からない。

とりあえずは一番お世話になった村一番（唯一）の道具屋さんによることにした。

カランカランと来店を告げるベルが鳴って、30秒ほどたってからゆっくりと恰幅のいい中年

のおばさんが店の奥から出てきた。これでも早い方だ。遅い時は5分も待つ。

「この皆はゆっくりでおおらかだ。

「あら、森のおじいさんとこのボウヤじゃない。ついこないだも来なかった？」

「今日はどうしたの？」

「ここに来る時はいつも間隔開いてましたからね。今日はお使いじゃなく、

挨拶にきました。ここを離れて、ちょっと旅に出ようと思ってまして」

「あら、あらあら。ずいぶん急ねえ、でもすっかり大人になっちゃって。

男の子は大きくなると巣立つちゃうものなのよねえ。ちゃんとおじいさんに挨拶してきた？」

「はい。あ、それとついでとってはなんですけど、路銀のために買ってほしいものがあるんですけど、いいですか？」

この世界にも通貨はあるが、このような辺鄙な村などでは物々交換がまだまだ主流だったりする。

村人同士だとなおさら。そのため、今までお金を一切貯蓄してこなかったため、挨拶ついでに物をお金にして路銀を調達しようと思っていた。

「別にかまわないわよ。肉や毛皮は、今日は持ってきてないみたいね？」

「えつとですね。この、蛍石なんですけど」

そういいながら腰にくくりつけてある皮のウエストポーチ（によく似た袋）から十個ほど丸い石を取りだし。転がらないようにそつとカウンターに置く。

蛍石自体はどここの山や森でも採る事はできる。しかし青色の蛍石はあまりないらしく、普通の蛍石よりいい値段で取引される。自分の住んでいる森の一番高い所でたまに採れるのだ。

綺麗に粗い砂で何年もかけて磨いた物だ。

「まあこんなにたくさん！割らないで磨くの大変だったでしょうにうーん、石は私じゃ分からないからちよつと旦那に見てきて貰うからちよつと待っててね」

そういっておばさんは蛍石を持って中に引っ込んでしまった。どれぐらいで売れるんだろうか？

相場が分からないが、この夫婦は騙したりしない。そうじゃなければこの村はこの人達を村にいれないはずだ。この村の人全員が信頼してるし。

所在なさに狭い店内を見渡しているとすぐにおばさんが戻ってきた。

「すごく丁寧にみがいてあるから一個8エス、青貨8枚だって。どうする？」

首都のオズマンで売ればもうちょっと言い値つくかもしれないってさ」

おお、意外と言い値が付いた。うれしい。首都では大体一日の食費4エス位らしいから、悪くない稼ぎだ。

「こちらで売らせてください。首都だと値切りされそうで」

「そうだね。慣れてからのほうがいいかも。しっかり勉強してきたよ。お金は黄貨3枚と青貨20枚にしといたよ」

「ありがとうございます。旦那さんにもよろしく伝えてください」

「あいよ。気をつけてね。エイワス様のご加護がありますように」

両手を組んで見送ってくれたおばさんにぺこりと頭を下げ、次はお酒を毎回分けてくれる村長の家に

足を運ぶ。50を過ぎてもぴんぴんしており、農作業を息子たちに取られて暇をもてあましている

ので部屋にいるはずだ。よく本を読んでいる。

久しぶりに来訪した事を告げると、めずらしく客が来ている事をドア越しに叫ばれた。

別に急ぎの旅ではないのでまたちょっとしたら来ますと言ったところ、入ってかまわないと言われて

しまった。ホントにいいのかなあ、と思いつつも家にお邪魔する事にした。

村長といっても他の人の家と全くかわらず、12畳ほどの広さに四角いテーブルが真ん中に置かれている。そこに村長と、一度話をした事のある旅商人が対面して座っていた。

「久しぶりだな坊主。じいさんから聞いてるよ。旅にでるんだってな。さびしくなるな。

俺の愚痴を聞いてくれるやつが減っちゃう」

「おひさしぶりです、知ってたんですね。挨拶をと思って寄りました。

来客中すいません。すぐに行きますので」

「いやいや、気にすんなよ。ところでよ、ちょっとお願いがあるだよ。

こいつ知ってるよな。うちの村に農具なんかを定期的に持って来てくれる商人なんだが」

「ええ、一年前に知り合いました。お久しぶりです」

「どうも、行商人のイスランと申します。あの時は名を聞きそびれましたが、ヨウイチさん  
でよろしいんですよね？」

「はい。お願いとはあなたが、ですか？」

俺がイスランに問いかけると、ちょっと困り顔でうなずいた。それを横で見っていた村長が口をはさんだ。

「実は、この村の街道に最近ガーウルフが出たらしい。隣の村の奴が何人か見てる。」

幸い被害者は出てないが、恐らく時間の問題だ。カラド伯爵は訴えても動いてくれなかった。

ああ、別に退治してくれって事じゃない。万が一、イスランさんが帰る途中に襲われたら逃げるのを

手伝ってくれないか？イスランさんはこんな辺鄙な村まで来てくれる商人さんだ。

もちろん報酬は用意してある」

ガーウルフ 狼が変異して魔力を帯びた狼。体長は普通の狼の約3倍。カヤスピードが他の狼より

数段強く、他の狼を従えて人間をよく狙う。発見次第その領地の貴族が討伐隊を出すのが決まりなのだが、カラド領を治める者は昔から市井の関心が薄く、対応は悪い。

「つまり、首都オズマンまで護衛をすればいいんですかね。別にそのくらいかまいませんけど」

「悪いな、坊主。報酬は前金で10エス、無事オズマンに着けばその時イスランが20エス払う。

あまり大した額は払えないがよろしく頼む。収穫祭の前までにはカラド領の全村の有志を募って、討伐するつもりだ」

「すみません、ヨウイチさん。私は何も心得がないので。ヨウイチさんは剣を？」

「ええ、まあ。狼はなんどか追い払った事があるので、よほどの事が無い限り大丈夫だと思います」

俺の発言で安心したのか、そうですねと言って深く椅子に腰かけ、ふう、とため息をついた。

村長に挨拶をした後、イスランはなるべく早く出発したいとの事だったので昼前には村を出た。

イスランの馬車は小型だがぎっしりと色々な物が詰まっており、中にはギリギリ入れるか入れないか位だ。なので御者台に二人は密着して座り、手綱はもちろんイスランが握っている。

大体2日ほどの道のり。しかし俺はちよつと緊張していた。

俺の初仕事。首都オズマンまでの護衛。おお、冒険者っぽい！！

**護衛依頼（後書き）**

通貨の説明は次回のまえがきにも

## 狼

ムブラ村を出発してから2時間ほどは張り切って周囲の警戒を行っていたが、あまり意味はないと

悟り、今は荷台で仮眠を取っている。と言うのも、ムブラ村から首都オズマンまでの街道の周辺は、不毛の土地で、ほとんど草木の生えない乾燥した土ばかりで、起伏もほぼ無く、地平線が続く場所なのだ。ムブラ村とオズマンを結ぶ街道は、ドでかくまっ平らな道をひたすらまっすぐ行くだけの道である

。故になんらかの脅威があるにせよ、隠れる所がなく、非常に見通しのいい場所では見落としはまずない。狼の群れや夜盗なんかがほとんど出ないのはこの要因が大きいが、何より獲物である人が滅多に通らないため旨みがない。安全な街道のはずだったが、今回のガーウルフ出現は皆首をかしげる

ばかりだ。イスランには、夜間の見張りをするので早めに仮眠を取ることを伝え、ちょっとでも異変

が起きたら知らせてくれといい、物がぎっしりと詰まった荷台に無理矢理体を入れて横たわる。

危険なのは夜。不寝番をするため、俺は色々な匂いのする場所で眠りについた。

イスランに揺り起こされると、すでにあたりは暗くなっており、街道から少し離れた場所に移動

していた。小さいテントが準備され、すでに火も焚かれていた。

「起こしてもらえれば手伝ったんですけど、申し訳ない」

「いえ、大した手間ではないので。それに今晚見張りをして頂くのですからこの位は。そんなことより夕食にしませんか？干し肉を戻してスープにしました。」

パンは黒麦ですので味は悪いですが」

俺とイスランが火を囲み、お互いの身の上話、といっても当たり障りのない程度にしながら夕食を済ませるとイスランはテントの中に入っていった。

明日は日が昇ると同時に出発するため早めに寝るイスラン。

俺は火を絶やさぬようにクズ木（枝が拾えないので村から持ってきたらしい）をくべながら

注意を全方位に向け、何か気配がしたらすぐ対応できるように左手には剣を持っている。

俺の視力は暗闇でもはつきりと見えるほど優れているが、死角は生まれるため油断はできない。

動物は火を恐れるため、夏が過ぎてまだ少ししか経ってない今ではあるが獣避けのために

火は絶やさない。

まだ暗いが少し明るくなってきた。あと一時半ほどで太陽が顔のぞかせるだろう。

今日は無事に終わりそうだった次の瞬間

俺の背後20メートル後方。一匹の痩せこけた狼がいた。すぐさま体を反転させ、身構える。

一匹だけ。斥候みたいなものか？森に居た時、エスクジいさんが言っていた。  
オオカミは狩りに関しては恐ろしく知能が高く、連携力もある。  
気をつける、遠くの狼がこっちを見ていたら獲物の様子を観察している場合もある、と。

足元の小石を拾い、あてずっぽうに投げる。

石は狼の足元に落ちてあらぬ方向に跳ね返り、体には当たらなかった。  
た。

しかし狼はまさか暗闇で向こうが気付くとは思わなかったらしく、  
すぐさま踵をかえすと  
走り去っていった。

離れていくボサボサのしっぽを目を細めて追っていくと

いた。こちらから90メートル先の少しだけ窪んだ場所に5匹の狼  
たちの奥でひと際大きな狼が。

ガーウルフ

遠くからでも牙をむき出しにしているのが見えた。

荷馬車に走り、干し肉をありったけ取りだして、テントの周りには  
らまく。少しでも注意を惹きつけなければいい。イスランを叩き起こし、  
荷馬車の真ん中に居るように説明し、ガーウルフが現れた事を告げる  
。イスランは青い顔をしながらもうなずき、なるべく厚くて硬い物  
を身の周りに置きはじめた。  
あれならば余程のことが無ければ大丈夫だろう。狼は自分の力量な  
ら問題ない。

問題はガーウルフ。自分にとっては未知数だ。油断はしない。

テントのすぐ前に俺は剣を抜き、正面をにらむ。5メートル程後ろの荷馬車は一切見ない。

狼達に人間はテントの中だと思わせるためだ。ガーウルフは頭も賢いらしい。

あいつは他の狼に荷馬車を襲わせ、自分は人間を襲うはずだ。だいが離れていたが、あの目は人間を憎悪している目だった。

現に狼たちは俺を大きく迂回し、荷馬車のさらに後ろに移動しようとしているのに対し、

ガーウルフは静かにテントと俺に向かって真つすぐ歩いてくる。

後ろの狼たちはもう荷馬車のすぐ近くまで来ている。ガーウルフとの距離はまだ20メートルほど開いている。

どうやら荷馬車の馬が異変を察知し、きよろきよろと首を回し、耳をしきりに動かし始める。

よし、今だ！！

俺は反転すると同時に地面を蹴り、猛スピードで狼たちの前に割って入る。5メートルの距離を一瞬だ。今にも荷台に飛びかかろうとしていた狼たちは、突然目の前に突風とともに現れた人間にびっくりして足を止めてしまった。

「悪いな」

まだ消えていない火のオレンジ色の光りが、狼たちの前で3回ほどキラッと反射した。

バシャリと5匹分の血が地面に飛び散り、ほぼ同時に狼たちが地面に崩れた。

なおも湧水のように広がる赤色と、ツンと来る獣と鉄さびの二才イ。

すぐさまテントの方を見ると、干し肉を忌々しそうに前足で蹴り飛ばし、テントの中の寝袋を噛みちぎっていた。

「そこにはだれもいねえよ、バーカ」

俺はガーウルフにそういいながらゆっくり近づく。あと3歩で俺の間合い。

牙をむき出しにし、ズタボロになった寝袋を首を振って放り出しながら俺を威嚇するガーウルフ  
あと2歩

自分の胸ほどまである背丈、幅は俺より広い。人の頭を丸ごと噛み砕くであろう大きな口と牙。  
あと一歩

そして口を大きく開き、跳躍した。鋭利なナイフのような牙が頭上に迫った瞬間

ガーウルフの前からヨウイチは姿を消した。いや、すぐ右隣りにいる。だらりと剣はをさげて。  
しかしガーウルフは気付かない。銀色の輝きがガーウルフの首を下から上に駆け抜けた。

剣を天に指すようにまっすぐと構えているヨウイチ。

ガーウルフの巨体が地面に沈むと同時に、その頭がコロリと胴体から分離した。

「・・・やっぱ師匠のようにはいかないか。回避と攻撃の完全なる同時か」

「あ、あのもう終わったんですか？出てもいいですか？」

「あ、ああはい。すべて終わりました。大丈夫ですよ」

中が余程暑かったのか、イスランは汗で前髪が張り付いている。よろよろと荷台から降りると

すぐそばに血だまりに沈む5つの死骸を見てギョツとし、さらにヨウイチの後ろのボロボロのテントとすぐそばに首が切断されているひと際大きな狼を見て絶句する。

「わ、私はてつきり森に住む者の特殊な技法か何かで追い払って静かになったものかと。一人でこれを

・・・すごい腕ですね。狼を複数倒すのもすごいです、ガーウルフをたつた一人で倒すなんておいそれと出来ませんよ普通」

「い、いやそれほどでも。それよりテントをボロボロにしちゃって」

「何を言ってるんですか。命だけでなく、馬、商品、馬車も無事だったんです。普通だったらその

どれもが奪われていました。テントなんてまた買えばいいんですから」

「そうですか。しかし、よく言うことを聞いて隠れてくれましたね。もしかしたら逃げ出してしまっんじゃないかと思ったんですけど」

「行商人は狼の怖さをよく知っています。あれだけ多ければ、逃げてもすぐに追いつかれて食い殺されていたでしょう。なにより、森に住んでいたあなたが言うのだからそちらの方が正しいのでしょうか？」

「いや、イスランさんはすごいな。冷静だったし、すぐに行動出来る」

「はは。あなたにはかないませんよ。ところでガーウルフの牙を取らないのですか？」

「どうやら希少な物らしい。こういった物なのか全く知らないのです。イスランに聞いてみると、魔力が溜まっており、歳を重ねた大きい個体の物は高値で取引されるらしい。」

この大きさならば100エスは硬いという。

俺は、喜び勇んで解体用のナイフで牙（剣歯）を二本、苦戦しながらも取りだす事に成功した。イスランからもらった布きれに包み、リュックにしまった。一本イスランに渡そうとしたが貴方のものですと断られたので、快く頂く事にした。

大した相手ではなかったが思わぬ報酬だ。

残りの道のは平凡そのもので、何も起こらなかった。

その間暇なので御者台の上でイスランに色々聞いた。

首都のいい宿や、懇意にしているという道具に紹介状を書いて貰

ったり。その他たくさん。

ああ、順調なスタートだなあ。最初の仕事の依頼主がいい人であった。

神の幸運を高めたってやつのおかげなのかな。しよっぱなドラゴンに襲われたりして幸運に関しては信じてなかったが、考えを改めてもいいと思えてきた。

そしてついに首都オズマンに到着した。

狼（後書き）

首都にようやく着いた  
続きは明日にでも

## 山羊亭（前書き）

青銅貨一枚で1エス 黄銅貨1枚で20エス 銀貨一枚で100エス 金貨一枚で

1000エス 5エスあれば一日余裕で暮せます。 一般的には青

銅貨を青貨、

黄銅貨は黄貨と略します。 エスはエスケンス王国が発行している貨幣です。

他にも貨幣の設定はありますがこのくらいで。 混乱しちゃいますよね、俺が。

## 山羊亭

首都オズマンの中に入るには検問を受けなくてはならないが、身分証などはいらない。

代わりに首を見せる。重犯罪者は例外なく首に髑髏の刺青を入れる。

刺青を入れられる程の犯罪者は大抵処刑されるのだが、ごく稀に脱走に成功する者もいるので必ず

確認するのだそう。それをパスし、人頭税（首都に住む人は免除）を払えば中に入れるらしい。

イスランは荷馬車と積み荷の分も払わなければいけないので俺とは別の列に並ぶため、ここで別れた。

「ヨウイチさん、大変お世話になりました。護衛依頼の報酬をお渡しします」

黄貨1枚を、俺の差し出した手の平に丁寧に乗せるイスラン。少ない報酬だが、イスランには色んな

事を教えてもらった。無事に依頼を果たせてよかった。合格点を自分あげていいはずだ。

「こちらこそ、色々教えていただいて感謝しています。また機会があったら是非」

「また逢うこともあるでしょう。ヨウイチさんに神の御加護がありますように」

そういつてイスランは荷馬車を移動させて、馬車専用の検問所へと向かっていった。

俺はそれを見送ると、小さな門の前に並んでいる人の最後尾につく。今は夕方なのでほとんどいないが、朝から昼間にかけては長蛇の列ができるらしい。

門は日が完全に落ちると閉まってしまい、明日の朝まで入ることも出ることも出来ない。

これはどこの首都でも同じだそうだ。

まだ日が落ちるまでは十分時間はありそうだ。前に並んでいる人たちは自分のような旅人ばかりで、

大した荷物は持っていないらしく、5分もかからずに自分の番になった。

門の前には上半身、すね、頭をプレート製の鎧で固めた兵士が二人微動だにせず槍を持ったまま直立

不動でたたずんでいた。その真ん中、ちいさな門をふさぐように立っているメガネをかけた老人が分厚い帳簿らしき物を開いて立っていた。

「では次の者、首が見えるように服を手で下げて。武器は兵士に預けるように」

脇の兵士に目配せをした。兵士は俺のすぐそばに来ると片手を差し出す。腰に下げている剣を剣帯ごと外して渡し、言われた通りに外套を脱ぎ、皮鎧の下に着ている服の襟を手で下げ、顎を上に向けた。

老人はちらつとだけ見て、すぐによろしいと言って帳簿に何か書き込み、老人は面倒くさそうに地面に置いたリュックを眺め始めた。きらりと老人の目が青白く発光した。

あれが魔力感知の魔法か。強力な魔力や呪いのかかった物品を感じる知覚魔法の一種だそうだ。検問する時は必ず行つらしい。

「む、荷物を拝見します」

俺の了承を得る前に、老人はリュックに手を入れて布にくるまれた  
ガーウルフの牙を取りだす

「ほう。久しぶりに見ましたな。ガーウルフの牙。ギルドの依頼を  
受けた物ではなさそうですね。

高価な物を持ちこむには税がかかりますので、これは二つで2エ  
ス。人頭税も2エスで4エスです。  
よろしいですか？」

俺はうなずくと青貨4枚を取りだし、老人に手渡す。さらさらと帳  
簿に何か書くと

「確かに。ようこそ、オズマンへ」

かなり棒読みだったが、初めての大都市なので気にならない。どう  
やら自分が最後ののか、老人  
は門の隅に置いてあった椅子に座り、大きく背伸びをした。

疲れている所悪いと思ったが、気になる事があったので背後から  
声をかけた。

「あの、休憩中申し訳ありません」

「ん？なににか？」

「先ほど、ギルドの依頼ではないとおっしゃってましたが、なぜそ  
うだと分かったのですか？」

「ああ、それは、中のギルドで依頼を受けて持って来た物品なら、

普通は一番初めにギルド依頼の物品を持っていくと告げるんです。でないと払わなくていい税を払うはめになります。ギルドに依頼された物は税が免除されますから。その場合、依頼書を見せててもらいますが」

「そうだったんですか。職務中失礼しました」

なるほど、そういう仕組みなのか。冒険者ギルドや商業ギルドなどが首都には必ずあるとイスランから聞いたが、細かい仕組みやルールは実際に入らないと分からない。明日冒険者ギルドにいつてみるか。今はもう夕方だし、少し疲れた。今日はイスランお勧めの宿を探して早めに休むとしよう。

そういえば冒険者ギルドの正式名称は探求者総合補助組織と聞かされたらしいが、長ったらしく語呂が悪いので皆冒険者ギルド、もしくは単にギルドと言っていると聞かされた。看板すら冒険者ギルドと書かれているらしい。

門をくぐると目の前は石畳の広場になっており、中央には大きな噴水がある。それを囲むように質素な木のベンチが何個か置かれており、恋人同士や、子供たち、老夫婦が楽しそうに話しをしていた。広場を中心に十字路に道が延びており、左と右は住宅街に続く道で、前の大きな道はメイン道路らしく、両脇には色々な店がズラリと並んでいる。それが400メートル程続いており、その向こう側にも

また広場があり、十字路に分かれている。そしてさらに奥のちょっと高くなっている場所に城が見えた

。今までムブラ村しか見た事がなかったので圧倒されてしまった。  
メイン道路からいくつも枝分かれ  
した小道も見え、先の見えない裏路地が広がっていた。本当に広い。  
広場の看板を見なければ迷子に  
なりそうだった。よし、まずはイスランさんに教えられた宿に行こ  
う。

山羊亭というらしい。メイン道路をまっすぐ進んで次の十字路を  
左に曲がり、左手前から3件目の  
赤い屋根の建物、とイスランに教えられていた。歩いて3分ほどで  
着く距離らしいので迷うことは  
ないはずだ。

「いらっしやい。お泊りかい？」

羊亭のドアを開けると、すぐ目の前のカウンターに40代位の女  
性が立っていた。

恰幅がよく、肝っ玉お母さんという言葉がよく似合いそうな人だ。

「ええ。部屋空いてますか？」

「空いてるわよ。料金は一人一日青貨4枚。食堂で朝、夕の食事付  
きだと6枚だよ。  
どうする？」

「では食事付きで。とりあえず3日でおねがいします」

「はいよ。じゃあ18枚だね」

そういって木の小皿を俺の前に置く。黄銅貨を一枚小皿に乗せて

女将さん（おそらく）の前に返す。

「うん。じゃあ部屋は二階の右側一番奥だから。これがカギね。食堂は一回の右側。上の客室への階段は左。食堂は夜までやっているけど、深夜にはだれもいなくなるからそれまでにすませて。」

うちの食堂はさ、朝は一般の人にも食べて貰ってるから少し混むんだ。悪いけどその中に混じって食べてもらうよ。メニューは日替わりで、酒は別料金。部屋のカギを食堂で働いてる娘に見せれば分かるから。あ、あと夜出かけてもいいけど、カウンターはうちの主人と変わるから、必ず声をかけていってね。その時鍵は置いていって。」

「わかりました。さっそくですが夕飯を頂きたいのですが」

「はいよ。あつと、お釣りね。食堂空いている時は厨房のコックに直接鍵みせてもいいから」

言葉通り、丸いテーブルが8つほど並んでいるけっこう広い食堂に入り、奥で野菜を切っていた

コックに見せると、鳥の香草焼きか豚の煮込みどちらがいいかと聞かれた。

鳥をたのんだ俺は、小さいバーカウンターにあった水差しを取り、各自のテーブルに置いてある

木のコップに移し、席に着いた。まだ少し夕飯には早いらしく、給仕がいらないためしようがなかった。

ぼつぽつと二階の客室や、外から帰ってきた他の客がテーブルに着くころ、俺の食事が運ばれてきた

。15、6才位の女将さんにそっくりの女の子がおぼんを抱えてこちらにやってきた。

明日はこの子に見せればいいんだな。お礼を言うとニコッと笑って他の客の注文を取りにいった。

目の前に置かれたご飯はホカホカと湯気が立っていた。カリッと焼いてある鳥の皮がすごくうまそうで、スープも肉と野菜がたくさん入っており、量も多い。パンは真っ白で柔らかそうなパンだ。

二日間程度とはいえ、硬いパンと味の薄いスープだけだったため、口の中のよだれがすごい。さっそく食べる事にする。

「いただきまーす」

すごくうまかった。感動した。イスランがおすすめと言う理由がわかった。

部屋に入ると荷物のベットの脇に置き、外套と皮鎧、ブーツを脱いでベットに横になる。

森の硬いベットとは違い、綿がいっぱい入っているベットは最高に気持ちいい。

「明日はガーウルフの牙を売りに行って、ギルドに行ってみよう」

今日は久しぶりにゆっくり深く眠れそうだ。

## 山羊亭（後書き）

続きはまた明日。

こんな適当な物語見てくれている人がいるみたい。  
ありがとうございます。

## 登録（前書き）

昨日書き終わって投稿しようとしたら操作ミスで全部消えた  
遅くなってすいません

へこむ

## 登録

次の日は山羊亭の食堂で食事を済ませた後、すぐに出かけた。

イスランが懇意にしているという道具屋へと向かう。紹介状を書いて貰ったので安く買い叩かれたりは

しないはずだ。俺は紹介状の裏に書いてある地図を見ながらその道具屋を目指す。

この世界の人達は日が昇ると同時に起き出して、簡単な食事を済ませるとすぐに働きます。

店もすぐに開くのだ。早朝にもかかわらず人がわんさかというメイ  
ン通りを抜けて、小さなお店が  
並ぶ小道に入る。人がギリギリすれ違える位の幅だが、色々な店が  
左右にみっちりと並んでいる。

その中の一つが、道具屋一品。そういう名前の店らしい。黒くく  
すんだ木の両扉を手で押して中

に入った。狭い店内には所せましと商品がならんでおり、棚には何  
かの目玉が瓶詰された物が並び、

人間の頭がい骨が透明なケースに入って飾られていた。天井からは  
何かの乾物がぶら下がっており、

少し不気味な雰囲気がある。誰か居ないのかとぐるっと店内を見  
渡すと、店の左奥に、小さな

机の前に小柄な老人がいた。膝の上に三毛猫を乗せ、こちらをじつ  
とみていた。

「あの、イスランさんの紹介で来ました、ヨウイチと申します。こ  
れ、紹介状です」

「・・・ふん。まあええわい。なにを持ってきたんだ？」

「ガーウルフの牙なんですが」

俺はリュックから取り出し、巻いてある布を外して老人に渡す。

「ほう。魔力量はなかなかだな。一つ120エスが妥当なところだな」

「ではそれで」

ちよつと待つてると言つて、老人は薄暗い店の奥に引つ込んだ。お金を取りに行ったのだらう。机の上に乗せられた猫があくびをしながら伸びをした。

すぐに老人は戻つてきて、俺に銀貨二枚と黄貨二枚を手渡す。

「ガーウルフを一人で仕留めたと書いてあつたな。腕はいいようだから、何か売りたい物があつたらうちに来い。それなりの値段で買おう」

礼を言つて、外に出ようと扉に手をかざした時、老人が言った。

「その、なんだ。バカ息子は元気にやっていたか？」

親子だつたんかい！！

商売根性たくましい親子にびっくりさせられたが、悪い人たちではなさそうなのでよしとする。

次は冒険者ギルドだ。山羊亭の女将に場所を聞いたら、自分が入っ

てきた門（南門）のすぐ目の前にあるらしい。興奮していて気付かなかった。完全なおのぼりさんである。

メイン道路に戻り、まっすぐ進むと、門の左向かいにひと際大きな建物が見えた。

ここが冒険者ギルドか。中に入ると、意外に小ざつぱりしていて綺麗だった。

もっと、荒くれどもがひしめき合い、喧嘩で壊された椅子やテーブルが倒れていたりしてるもの

だと想像していたのだが。残念な事に受付の人は全員おっさんだった。

早朝だからか、自分以外には3人しかいない。受付も五つある内の二つにしか人がいない。

入口から一番近い受付が空いていたのでそちらに向かう。

「すみません。新規で登録したいのですが」

「はいはい。では首を見せてください。はい、大丈夫です。次はこの黒い紙に手を置いて自分の名前

を言ってください。偽名を言っても登録できませんので。おや、名字持ちの方でしたか。

これは失礼を」

名字は貴族や王族のような高い身分の者についており、一般人は名前だけだ。

説明できないので笑ってごまかした。

「では次に依頼の受け方や規約を説明します。重要な事なのでよく聞いてください。まず、」

一、探求者総合補助組織、通称冒険者ギルドは、斡旋した依頼で死亡、負傷しても一切の保障はしない

また、冒険者ギルドに多大な損失を出した場合や、犯罪行為が認められた場合、強制脱退とともに、損害賠償を求めらる。

二、依頼は依頼者の推薦、もしくはギルドの斡旋から選び、受付で内容を確認後、依頼書にサインをすれば契約が成立する。この時、依頼者は成功した場合に報酬を払う義務が発生し、請負人は受け取る権利が得られる。なお、報酬の提示額よりも多く受け取る事を禁ずる。

請負人は依頼書の控えを渡されるので、任務成功の報告、失敗の報告をするまで厳重に保管する事。もし紛失した場合、成功しても報酬は半額になる。失敗した場合でも紛失した場合は提示額の一割の支払いが発生する。

三、依頼請負人にはランクがあり、1〜5段階に分けられる。依頼の難易度も？〜？段階あり、ランク+1難易度までの依頼を受ける事が可能。

ランクの昇格にはそれぞれのランクで二十回の依頼をこなす事。ランク3からは素行、依頼遂行能力などの冒険者ギルドの評価が一定以上の者を、本人の理解を得られれば冒険者ギルドが認定していく。

話を要約するとこんな感じだった。長い説明が終わると、さっそ

く難易度？の依頼が掲載されている

掲示板に向かう。黒板ほどもあるコルクボードに所狭しにピンで依頼書が貼られている。

本当に多種多様な依頼がある。

下水道に落としたり指輪を取ってほしい、森に言って薬草を取ってきてほしい、さらには酒癖のある

旦那を懲らしめてほしいなど。なんでも屋といった感じが。

さて、なににしよう？

## 登録（後書き）

依頼なににしよう？

こんなのがいいという希望がありましたら是非書いてください。

夜の6時まで書いていただければ今日中に書きます。

まあないとおもっけど、一度やってみたかった。

## ビルマ湖

依頼主 ビルマ湖漁業組合

養殖魚盗難被害防止 ビルマ湖での夜間の見張りです 至急求む

報酬30エス 朝、夕食支給あり 期間1日

難易度？

確かここから東にちよつと行った所にあるのがビルマ湖。確か川魚を養殖していて、それを塩漬けした物が有名。山羊亭の朝食として出てきた。脂の乗ったアユみたいな魚でおいしかったな。

白い米が欲しかった。話を聞いたところ、女将さんの弟がビルマ湖で漁師をやっているらしい。そんな話を朝したばかりなので目に引かなかった。

これでいいか。徒歩で日帰りできるぐらいの距離らしいし。

さつそく受付にもって行き、また黒い紙に手を置いて名前を言う。

これは本人確認のときは必ず行う。

（人間の体内魔力の通り道は一人ひとり違うため、それを本人かどうか確認するためらしい。

要は指紋みたいなもの）

依頼書にサインをし、道順を聞いた。片道3時間ほどで着く。近くてよかった。

この世界は基本的に歩きがメインになる。隣の村や町まで2日3日かかることはざらで、

山奥の集落なんかは10日以上かかるところもある。ビルマ湖は歩いてすぐ、と行っていいぐらいに近い。

一度山羊亭に戻り、女将に依頼で2日帰って来ないことを告げ、帰ってくるまで部屋を取っておいて欲しいと言い、さらに一日分払おうとしたが、前金で二日分もらっているでその一日分はただでいいと言ってくれた。好意をありがたく頂き、水筒に水を入れてもらい、干した木の実と肉を少量譲ってもらい、さっそく出発した。

今の気候は秋に入り始めなので暑すぎず、寒すぎずで移動が楽だ。自分が入ってきた南門（ムブラ村はオズマンから南南西の場所）とは反対の北門から出て、街道を二時間ほどまっすぐ行って別れ道を右に曲がり、一時間ほど行くとビルマ湖だ。

ビルマ湖に近づくとつれて緑が増えていき、牧草地帯のような場所もあった。

これには、魔力の地脈と言われるもの大きく影響していると言われているが、教えてくれたエスクジいさんも詳しいことは知らないらしい。冒険者にはあまり活用する場面がなさそうなのでいいのだが。

途中で小休憩をとろうと木陰に腰掛けると、ちょうどいい温度と風のせいで眠ってしまった。

まあ別に何時までに来いとかはこの世界にはないし、夜間の見張りと書いてあったので遅くとも

夕方までに着けばいいだろう。あと一時間ほどで着くだろう。今は昼ごろだ。一日二食が基本だが、

腹が減つたら軽食を食べる人も大勢いる。宗教的理由で食べない人もいるらしいが、自分は大勢の中の一人だ。持ってきた干し肉を食べて、デザートに木の実を食べた。

のんびり歩いても夕方前には到着し、湖の目の前にあるちよつと大きい掘立小屋をノックした。

中から、ひげを蓄えた筋肉質な男が出てきた。俺は早速依頼書を見せるが、男は年若い俺を一瞥し、

眉根を寄せて、本当に大丈夫か？と聞いてきた。森で狩りをしていたので大丈夫ですよと言うと、

そうか、といって中に通してくれた。詳細を聞くと、けっこう被害が大きいことがわかった。

今の季節はこの魚の産卵シーズン（一年に春、秋二回生むらしい）で、稚魚を増やすための大事な

時期らしい。その子持ちの湖魚（この魚の名前）を狙ってなに者が夜な夜な盗んでいるという。

エスケンス王国としても大事な税の収入源なので、一度軍を派遣し、警戒にあたらせたが、

警戒されて姿を見せず、結局犯人は捕まらなかった。そしてしばらく盗難被害はなかったのだが、

数日前からまた始まったという。

「最初は周辺の森に住む獣の仕業だと思っていた。別にそれなら気にしなかった。俺たち人間が独占

するわけにはいかないし、大した量でもないしな。だが何日かして、メスだけが大量に減っていた。

俺たちは必ずメスとオスのバランスに気を使っていたから、これはおかしいと思っただ。

そのあたりに、ここの近くを夜中に通った行商人が不審な人物を見た。夜中に靴がずぶぬれで、背中に大きな樽を背負った二人が足早に去って行ったと。今はまだなんとか許容範囲だが、これ以上やられたら来年の漁に影響が出る。前は大体5日前だった。今夜あたり来るはずだ。俺たちも交代で見張りをしてるんだが、いかんせん人も少ないし、湖は広い。人を雇うにもあまり金はないし、国も次に派遣できるのは次の月だと言うし。あと5人は欲しいんだが、今日はあんた一人だけみたいだ。

頭を抱え、黙ってしまふ男。確かに、湖は広い。左右が絶壁で挟まれ、少し細長い湖は縦に長い。といっても幅は400メートル以上はあり、全長3?はあるだろう。水はきれいな青色で、深いところで俺の身長位か。船がなくても魚を採って運ぶことはできそうだ。

ふむ、どうしたものか。依頼は見張りだが、世話になってる人の知人がいるところ。なんとか力になってやれないものか。なにより朝食で食べた焼き魚が食えなくなるかもしれない。

俺は木の椅子に腰かけ、しばし考える。日が暮れるまで3時間ぐらいはある。すこし考えることにした。

## ビルマ湖（後書き）

なんか自分がかくどすごい地味になる  
もっと派手でかっこいいものが書きたいのに  
どうしてこつなつた  
楽しんでもらえたら幸いです

## 捕縛　そして情け

夕焼けが湖を赤く染め上げ、少し冷たい風が吹き始めたところに、漁師全員が仕事を終えて掘立小屋

に帰ってきた。ここで働いてる人は全員で10人。いつもは二人一組の6人体制で見回りをしているらしい。

「この湖は広いし、月明かりがあっても崖のせいで影ができて見えにくい。泥棒には都合がいいんだ。

一度だけ、水音を聞いた見回りのやつが、走ってその場に行くと樽を置いてすごい速さで逃げて行った

やつを見ている。罾をしかけようとも考えたんだが、逆にこっちが引つかかったら大変だし、

昼間はみな仕事がある」

みな、仕事を終えた後も朝まで神経を張り詰めて見回りをして、憔悴していた。無理もない。

朝から夕方まで仕事をして、朝方まで見回りをする。交代で寝るといふのはあまり疲れがとれない。

それが何日も続くのはきついだろう。

「あの、俺に策があるんですが、聞いてもらえますか？ 確実ではないですが、うまくいけば捕まえられるはずですよ」

その場にいた人たちはひげの男（漁長をやっているらしい）の隣にいる俺に期待の視線を向ける。

あまり期待されるのは困る。第一今日くるかわからない。

「え、えとですね。これにはみなさんには湖を囲む感じでそれぞれ待ち伏せしてもらいます。」

まあそれだけなら人を分散しすぎて失敗するでしょうが、今回は「

作戦はこうだ。

どうやら犯人は、夜目が利いて、足も速いやつだ。単独、もしくは二人の少数。湖全体に人を配置しても大勢で囲まなければ逃げられてしまう。なのでその場では捕まえない。

のこのことやってきた犯人に盗みをさせ、それを発見したものが松明に火をつけて俺に合図を

送る。その間は湖からやや離れて茂みに隠れてもらう。合図を確認

した俺はすかさず頭上に

魔法 燃烧 フレア を合図された場所の頭上に打ち上げる。そうすると一瞬だけだが犯人が見える。

そこに全員と俺が一斉に走り出す。犯人は荷物を置いて逃走するだろう。そこで捕まえられれば

よし。捕まえられなければ俺が追跡して捕まえる。100メートルを3秒で駆け抜ける俺が見失わなければほぼ確実とっていい。なにより、

「これは予測ですが、犯人はどこかの村の獵人です。話を聞く限り、目と、耳のよさ、重い

荷物を持って走れる足腰の強さが証拠です。あと、町には持っていいっていないはずなので町の

人ではないはずです」

そこに漁師の一人が口をはさむ。

「ちよつとまってくれ。どうして村人だとわかるんだ？確かにこの魚を俺たち以外が

いきなりオズマンに持っていったら門番に怪しまれるが、もらいものだとか、売ってもらったと

言えばどうともなる。質の悪い商人の可能性もあるはずじゃ？」

「決定的なのは、まだ犯人が捕まっていないことです」

その場にいる全員が一様に首を捻る。

「もし、首都オズマンに入ってさばくとしたら、まず門番に見られる。うまく通ったとしても、

複数回やれば目をつけられ、ばれます。国がわざわざ軍を派遣する位ですから、首都に来たかどうか

ぐらいは真つ先に調べたはず。商人だとしても、売るためにはオズマンにいかねばならない。

今の季節だと持って一日半、長くても2日。生物ですから日持ちしないため、売るためには一番近い

オズマンに持っていくしかありません。なぜ子持ちのメスだけ狙うかはつきりしませんが、食糧

が欲しい村人が妥当なところでしょう。しかも、大きなタルで大量にということはおそらく、村ぐるみ

でしょう。犯人は村に住む、もしくは村に頼まれた狩人だと思いません。むしろん推測ですが」

そう説明すると、おお、とか、なるほど、冒険者というのはすごいな、といった感想が次々と

飛び出し、俺は尊敬のまなざしを浴びた。少し気分がいい。

「本職ではないですが、俺は狩りをしていたので逃げ道は大体予測できます。おのずと侵入経路も。」

狩人は全体が把握できて、かつ獲物をしとめ安い場所を選び、そこから一番逃げやすい道をあらかじめ

決めます。それを踏まえて、みなさんの配置場所を決定します。それでいいですか？」

漁長はその場にいるみなをぐるっと見渡し、反対意見が無いのを確認すると俺に頭を下げ、

よろしく頼むと言うと、俺を除く全員が一斉に頭を下げた。

任せてください、と笑顔で答えるとみな少し笑みがこぼれた。今日現れなかったら明日も来ようと決めた。

さつつそく漁師たちには夕飯を済ませてもらい（夕飯の焼き魚はやっぱりうまかった）、

夕日が落ちて見えなくなる前に、3か所の茂みに別れて隠れてもらう。一番確率の高そうな、

掘立小屋から一キロほど離れた場所に4人。掘立小屋から大分近いが崖の影になっていて死角

となつている場所に3人。一番遠い湖の端に3人。端の方は魚がほとんどいないため、確率は

低い。一のため。一番確率の高い場所は湖の真ん中あたりで、中央に行くと魚が集まっております、

浅瀬が広がっているので採りやすい。すぐ後ろが人の背丈ほどもある茂みが鬱蒼と茂っているため、

追跡をかく乱しやすい。事実、走り去った犯人はここに入っている

たらしい。

一組に一本ずつ松明を持たせ、犯人が盗みをするまで絶対に手出しをしないことと、合図が出るまで息を潜ませる事を伝える。

俺は合図が見えるように掘立小屋の屋根に寝そべる。

俺の目なら数キロ先でも光があればおよその位置はわかる。

今日は雲が多く、月明かりが無い。犯人に都合がいい分。今日現れる確率も高まった。

深夜。今日は、もう現れないのではと皆が思い始めた頃、中央の湖でかすかに水音がした。

掘立小屋から一キロ離れた本命の場所だ。しかしここからはさすがに見えない。

魚が跳ねただけかも知れない。もう一度、パシャッとわずかに水音がした瞬間、4人が待機して

いる茂みからかすかにオレンジ色の光が左右に揺れた。急いで魔法を起動する。

右手を上空に向け、魔力を手の平に集め、丸い球体をイメージする。

すると不可視の魔力が熱を帯びた赤い玉になる。それは透き通った水晶のようで、自分でやっという

見とれた。それを手のひらに浮かべたまま肘を曲げて一旦体に引き付け、勢いをつけて上空に押し出す

。砲丸投げの用量だ。ちょうど合図があったあたりに球体が届くと手のひらをギュッと握り、爆発

させる。本来、魔法は頭の中で操るので、体の動作は必要ないのだが、俺はこうしないとイメージがうまくできないため、どうしても投げるしぐさが必要だった。

すでに見つかっているのに気づいていたらしく、湖から出て、樽

を置き去りにして走り出そうとしているのが爆発の光で一瞬見えた。俺は屋根から飛び降り、急いでその場に向かう。犯人の体の向きは後ろの茂みを向いていた。読み通りだ。残念ながら4人が茂みの前に立っていれば、そこには入れない。案の定、近づくに連れ、この盗人が、ここは通さねえなどの声が聞こえてきた。

端に居た人たちも松明をつけてこちらに向かっているのが見える。掘立小屋の近くに居た人たちも俺の後ろから走ってくるのがわかる。策が完全にハマった。犯人は前の茂みに逃げようと向かったがそこには4人が並んで待ち伏せしていた。あわてて右か左に逃れようとするが、どちらからも松明の光が迫ってくる。

逃げ道は後の湖しかない。しかし、中央に向かえば人の頭まで浸かるほどの深さがある。

対岸に逃れるには時間がかかる。すると一瞬躊躇するだろう。そして足を止める。

その間にも俺たちはどんどん集まる。

そして、追ってくるやつも条件は同じ、水中は遅くなるから、と考えて湖を渡ろうとする。

案の定、俺がその場に着いたころには、追い詰められた犯人は腰まで湖に浸かり、手で水をかきわけて必死に前へ進もうとしていた。どうやら泳げないらしい。待ち伏せしていた者の一人が上着を脱ぎながら湖に入ろうとしていた。俺はそれを駆け寄りながら手で制し、自分が行くといい、湖に向かう。

浅瀬から足を伸ばし、両足を水面に着け、

・

湖の上を歩きだす。ばしゃばしゃと音を立てて進む犯人の脇を、悠々と、まるで道を歩いているかの

ように水面を進み、首まで浸かり、必死に水かきをしている犯人の

前に回り込み、抜刀した剣先を突きつける。

突如目の前、しかも水面に人が現れ、剣が鼻先に刺さっている。タラリと血を流しながら、犯人はポカンと口を空け、水中で固まった。ついでに陸の上の漁師たちも水面に浮かぶ俺を信じられないといった顔で呆然としていた。

「おい、今ここで魚の餌になるか、陸に上がって事情を説明するか、どっちか選べ」

すぐすぐと陸に上がったずぶ濡れの犯人を殴ろうと、漁師たちが一斉に飛びかかるうとしたのをひげの漁長が一喝して制した。さすがはまとめ役、冷静だ。聞かなければならないことはたくさんある。今日は一人だったが、少なくとも仲間がいるはずだ。しゃべれなくなつてはせつかく捕まえても意味はない。漁長の言にしびしび納得し、荒縄で犯人を縛り、一旦掘立小屋に連れていく。

椅子に無理やり座らせ、さらに縄で椅子ごと縛られた犯人はガツクリとうなだれて、されるがままになっていた。しかし、周りが、おまえはどここの奴だ！さつさと仲間の場所を教える！と激しく詰問しても一切言葉を発しなかった。

寮長が無言で立ち上がり、暖炉の火かき棒を取り出すと、無表情でこう言った。

「俺は、暴力は嫌いだ。だが、こっちも泣き寝入りするわけにはい

かない。こつちも

生活がかかっている。みんな家族がいるしな。だからこれ以上、被害を出すわけにはいかない。

悪いが、どんな手を使っても、吐いてもらっぞ」

それを見た犯人は顔がますます青白くなっていき、ずぶ濡れで体温が下がっているはずなのに、額からダラダラと汗が出てきた。

観念したのか、小さい声でポツポツとしゃべりだした。

自分は頼まれたのだと言う。首都オズマンを西に3日ほどいった所の小さな村の村長に、うまくいったら村の娘を嫁にやると言われ、引き受けたと。男は村からやや近い森で狩りをして暮らしていた。そういった者は伴侶を得るのは相当難しいため、弱みに付け込まれたのだろう。

男はすでに40に入ろうかという見た目で、白髪交じりのボサボサ頭に、獣の皮を適当に巻いた簡素な服を着た狩人だった。意外な事に、村長は食糧確保のほかに、卵をふ化させて村で養殖

しようと考えているらしい。しかし、素人がやってそう簡単にいくはずもない。

ただ卵を腐らせて全部失敗しているという。その度に男はときどき村長の息子を伴い、自分が湖に入って魚を取り、街道で待機している村長の息子と合流し、二人で村まで運んだらしい。

いつのまにか村長との約束は、ふ化に成功したら村娘はもらえるということになってしまい、しぶしぶ盗みを繰り返したという。

村も去年は不作だったらしく、税を支払うのに精いっぱい準備が全く無く、冬を越すための苦肉の策だったらしい。

話を聞き終えた漁師達は、哀れな男に罵倒や怒りを向けるのをためらい、苦々しく、顔を背ける。哀れだ。おそらく捕まっても村は知らぬ存ぜぬを通し、見捨てるだろう。

最初から、捕まっても平気な、都合のいい村以外の人間だから主犯に選ばれたのだ。皆それが分かってしまった。

「どうします、寮長？」

一人が目を瞑っている漁長に向かって問うと、全員が漁長に顔を向ける

「・・・俺は、今回の件を村と直談判して治めるべきだと思う。無論、今までの被害の弁償はしてもらい、この男にも罰を与えるつもりだ。だが、この男や、村を犯罪者として国に差し出せば、村は罰としてもっと税が上がリ、若い者は強制労働させられて、もっと苦しくなる。するとどうだ？また盗む奴が出てくるんじゃないか。いや、まだ盗むだけならいい。人を襲うようになったら俺たちは仕事ができなくなるぞ。皆も一度や二度は経験したことがあるはずだ。

冬をまじかに食糧が足りなくなるあの恐怖を」

その場に居た男たちは納得し、明日全員で村にいき、問い直すこ

とに決めた。

捕まえた男は、私刑はせず、冬に着る防寒着一式をを全員分ただで作成することで手内とした。

男はそれを聞いて安心したのか、ボロボロと泣き出した。

漁師達の一人がそれを見て腕の縄を外し、暖炉で温めていた葡萄酒をコップに入れて手渡した。

椅子に固定されたままだが、大分楽になり、またもやボロボロと泣き出した。

すまねえ、すまねえといいながらチビチビと飲み始める。

結局、完全に日が昇るまで皆で飲み明かした。漁師達も、犯人も、漁長も、俺も。小屋の中が

アルコールの匂いで充満する位飲んだ。

ついさっきまで殺気立っていた連中がいつしよくたになってドンチャン騒ぎだ。

俺は喧騒の中で思った。

誰だつて好き好んで誰かを責めたり、罰したりしたくないんだ。

分かりあつて、一緒に酒を飲む方がいい。少なくともここにいる人たちはそうだ。そう思いたい。明日は途中まで皆と行き、

俺は首都に帰る。後は漁長がうまくやるだろう。

初の依頼はいい結果で終わりそうだ。

そして、全員でゲロまみれのまま就寝した。

捕縛　そして情け（後書き）

ちよつと長くなつてしまいました  
地味だ

果てしなく地味だ  
面白いのかこれ？

## 依頼達成 悪夢の前振り

結局、全員昼過ぎまで寝てしまい、湖で酔いを醒ますために水浴びをしたり、かなり遅い朝食を

取ったりでオズマンに着くのは夕方になりそうだった。漁師たちは一度オズマンで一泊し、（全員オズマン住民）、盗みを働いた男を伴い、盗みをさせていた村まで行って問いただす。

しらを切るようなら、小川をせき止めた所にある卵と、村の蔵に隠した塩漬け中の湖魚（全部狩人がしゃべった）の事をいえば観念するだろう。村も漁師たちを口封じしようなどとは思わないはずだ。せつかく内々に処理してくれるといっているのにリスクがでかすぎる。漁師たちも村が貧窮している

のは分かっているので悪いようにはしない。俺の出番は終わった。

今狩人の男は拘束を解かれ、漁師たちに囲まれて街道を進んでいる。彼の表情はまるで憑きものでも落ちたかのようにすっきりと

していた。やはり盗みは気のすすまない事だったのだろう。ニコニコと笑いながら、周りの漁師たちに

なんの毛皮で防寒着を作るか相談していた。彼は魚を盗んだ罰として漁師たち全員分の防寒着を作る事になっていた。

そんな彼を、列の最後尾から眺めていてふと思い出した。昨日聞こうと思っていたが酒を飲んですっかり忘れていた。後ろから声をかけ、聞いてみる事にした。

「ちょっと聞きたい事があるんですがいいですか？」

すると狩人は照れ臭そうに笑い、ボリボリと頭をかきながら言った

「旦那あ、盗みを働いた俺に丁寧な言い方しなくていいいんですさあ。照れ臭くてかないませんぜ」

すると周りもしきりにうなずき、もっと俺たちにも気さくにしゃべってほしいと言われた。

こっちでは敬語変なのかと聞いてみると、まるで貴族のようだと言われた。というか、

俺を道楽で冒険者をしている貴族の次男坊あたりだと思っていたらしい。

エスクじいさんには何も言われなかったので気にしなかった。ちよっとこれから気をつけよう。

「おっと、それで旦那は俺に何を聞きたいんで？」

「あ、ああ。別に大したことじゃないんで・・・ないんだけど、魚を捕まえてるにしては妙に水音

が聞こえなかったけど、どうやって獲ったのかなあと。樽の中の魚は生きていたし」

「それは、雷結晶を使って一瞬だけ気絶させるんですさあ」

「雷結晶？」

「あ！もちろん、気絶させるだけなんで、小指の爪ほどしかないやつしか使ってませんぜ。

周りの魚には全く影響はありやせんぜ」

雷結晶か。

「そこらの石で簡単に割れますんで、細かく砕くとバチバチっとな

るんで、それをちょっとだけ水に入れると、中の魚は気絶して、上に浮かんで来るんで、その中のメスだけ選んで獲ってたつつうわけです」

むむ、電撃を放つ石か。魔法が苦手な俺にはいいかも知れない。もつとも、どこで手に入るのかも値段も分からないので調べる必要がありそうだ。

狩人に聞いたが、村長から渡されたので詳しいことは分からないらしい。

漁師たちにも聞いたが、かなり高価な物だという事以外は分からなかった。

実物を見たかったが、村長は雷結晶を一度に一回分しか寄こさないため手元にはないという。

まあいいか。どうせ道具屋一品にはあるのではなからうか。あの店の商品のラインナップ的に

無かったらおかしいとまで思う。あそこは店の雰囲気も、道具も怪しい。明日にでも行ってみよう。

皆慣れたもので、休憩を挟まずに歩いて夕方にはオズマンに着いた。

オズマン住民の漁師たちは門を顔パスで通り、狩人の人頭税は漁長が出した。そのまま漁長宅で

一晩過ごすらしい。門の前で俺たちは別れを告げた。依頼書には、昨日の晩には漁長の依頼達成を認めるサインを書いて貰っているため、それをギルドに提出すれば終わり。

住宅街に向かう漁師たちを見送っていると、漁長だけが走って戻ってきた。

「どうしたんですか？」

「いや、渡したい物があってな。今回は本当にありがとう。まさかこんな依頼に、魔法が使えて、頭の切れる冒険者が来てくれると思ってなかったんだ。結構名の売れてきてる冒険者だったりするんじゃないか？」

「いえ。俺はこの依頼が初めてなんです」

「・・・おいおい。冗談きついで。俺は駆け出し冒険者何人が雇った事があるが、あんたみたいなのは初めてだ。名前、聞かせてくれるか？初めてでこれならすぐに有名になる。聞いておいて損はない」

「ヨウイチです。ヨウイチ・サキです」

「覚えておくよ。そんな将来有望な冒険者に、送り物だ」

そう言って、小さな革袋を投げて寄こす。中身はお金だった。黄貨が二枚に青貨が30枚ほど。

「ギルドでもちゃんと30エスを受け取ってくれよ。渡した金は俺たちの気持ちだ」

手元の革袋から、住宅街へとつづく道の方へ視線を向けると、漁師の皆が遠くから手を振っていた。

「お前が酒で潰れた後に皆で話したんだ。ここまでやってもらって30エスはないだろうってな。だから各自出し合ったんだ。少ないが、受け取ってくれ」

俺は鼻の奥がツンとするのを感じながら頭を下げた。互いに手を挙げて別れを告げた。

遠くにいる漁師たちにも手を振りかえし、意気揚々とギルドに入って行った。

「初の依頼はどうでしたか？ヨウイチさん」

空いている受付に行くと言頼を受けた時のおっさんだった。手を黒い紙に置き、名前を告げる。

「ヨウイチ・サキ 成功しましたよ、これ以上は無いくらいに」

「それはよかったですね。では依頼書の提出をお願いします。うん、ちゃんとサインしてありますね」

、初めてにしてはなかなか・・・依頼主評価10・・・すごいですね。初依頼で評価10点満点は滅多にないんですよ」

なんと気持ちのいいことか。漁師たちには感謝され、報酬もだいぶ多めにもらった。ギルドの評判も上々。俺はやっぱり運がいいのだ。今まで疑ってごめんなさい神様！！

そのスーツいきなりはじけ飛んで周りから白い目で見られるか思ってますませんでした！！

俺はスキップをしたい衝動を我慢し、山羊亭に向かう。夕食を食べ

たらどこか飲みに行こうと  
決めた。金はあるんだ。飲んじゃうよー。

そして俺は、この時の自分を殺したい位に後悔する事になる。

依頼達成 悪夢の前振り（後書き）

次回は仲間が増える、かも知れません。  
戦闘描写が増えるため、二分割するかも  
今日、明日には投稿します

## 何も悪い事してないのに巻き込まれた

俺は山羊亭で夕食を摂ったあと、道具屋一品のある小道を奥にさらに進む。

どこか美味しい酒を出す所はないかと、女将の旦那さんに聞いた所、ここを紹介された。

5番街の酒場という地名なのか店名なのか分からない名前だが、皆そっ呼んでいるらしい。

少し高めだがこだわりの酒と肴を出すらしい。知る人ぞ知る名店なので行ってみるといふ事なのでかなり期待している。

西部劇に出てくるような上と下が短い扉を、体で押しして入る。

年季が入っているが、綺麗に掃除が行き届いており、店内は無数のカンテラを惜しげもなく

使っているため、かなり明るい。この世界には電気が無いため、夜間の照明は油を燃焼させる

カンテラが主で、一つではせいぜい半径1、5メートル位しか照らせない。

燃料の油もただではないので夜の照明はどこも暗めだ。しかし、ここは違う。

まずカンテラが一般的な物より倍近く大きい。それを天井、柱の横にたくさん設置しており、まるで昼間のような。

入口に立ちつくす俺を見かねたのか、この店の主らしき男性が、前のカウンター席を手の平

で指すと、どうぞこちらへ、と案内されてしまった。

やばい、これはちよっとどころかかなり高い店にきてしまったかも知れない。

店主（だと思ふ）は黒い皮のメニューを俺に差し出し、ご注文が決

まりましたら声をかけてください  
と言われた。俺は渡されたメニューを開くのを躊躇った。

贅沢な照明と、酒場とは思えない接客。立派な黒皮のメニューを  
開く手が重い。

恐る恐る開いたが、心配するほどではなかった。確かに高いが、  
一般的な酒場の2倍程度だ。

俺はとりあえず麦酒（ビールの香りと苦みをきつくした微炭酸）と  
豚の腸詰めを頼む。

店主はすかさず木の樽から常温の麦酒をコップに注ぐ。それを俺  
にどうぞと差し出した。

コップに鼻を近づけるだけで麦の香りがフワツと舞った。ごくりと  
唾を飲み込み、我慢する。

店主は、あらかじめボイルしてあるのだろう腸詰めに、グツグツ  
と煮立ったスープ（黄色だから  
ただの熱湯ではないはず）に12、3秒ほど泳がせて、水分を切っ  
て皿に盛り付けて俺の前に置く。

一緒に木のフォークを渡されたので、俺は湯気の立っている腸詰  
めを勢いよく突き刺す。

ぷつつとわずかな抵抗で刺さった腸詰めの穴から透明な肉汁があふ  
れ出す。

もつたいないので半分ほどを一気に食べると、パンツと皮がはじ  
ける音とともに、少し辛めの  
香辛料の香りと、肉の脂の旨みが一気に口に広がる。

うまい。ホントにうまい。口の中をすっきりさせるため、我慢し  
ていた麦酒を一気にのどに  
流し込む。炭酸が舌とのどをピリピリさせながら通過し、遅れて強  
い麦の香りが鼻を抜ける。

なんだこの最強コンビ。ビールも腸詰めも今まで生きてきた中（前の世界も含む）で

一番うまいかもしれない。目の前の店主に、すぐくうまいと伝えるとニツコリと笑い、ありがとう

ございますと言った。そういえば、他にお客は居ないのかと首を後ろに回すと、身なりのいい商人

が二人、にこやかに歓談している他は、お客の姿が見えない。まだ夕飯時を過ぎて間もない時間

だからこれから人が来るのだろう。

それから一時間ほどで2杯の麦酒と腸詰めを追加し、ほろ酔い加減になってきた所で一気に

お客が増えた。カウンター以外の5つのテーブルは満席になり、カウンターも4つある席の内一個しか空いていない。俺の隣なのだが。

それから一時間ほどだったが、客の入れ替わりが多少あるものの数は減らず、にぎやかな様子は変わらない。つい先ほど空いていた俺の隣に女性が座った。

その女性はシンプルだが上品な黒いローブを纏った美女だった。

この国では珍しく黒で、背中の中ばまで絹のようにまっすぐな髪。

大きな茶色い瞳は勝気そうな印象を与える。わずかに裾から出ている手は神秘的なまでに白い。

体に密着するローブを押し上げ、主張する胸と尻。

彼女は店内に入った瞬間、喧騒が徐々に静まり、男たちの熱い視線を集めた。

俺はそんな美人が隣に座ったため（他に席がないので当たり前）少しばかり緊張した。

何せ今まで老人と二人暮らしで、若い女性なんてムブラ村でしか接した事はなかった。

話したことなんか村娘と挨拶をするぐらいだ。なので隣の美女を意識しつつも、顔や視線は絶対に向けない。

しかし、エスクジいさんの厳しい修行によって会得した技がある。それは、

盗み見。相手に気づかれないうずかな眼球操作で、隣の人物や書類を横目で見える。

それを今フルに活用し、相手に感づかれることなく、美女を見る。

本当に綺麗だ。これはいい酒の肴だ。美女は店主に葡萄酒を頼み、両手で受け取ると、

ちびちびと飲み始めた。彼女はカウンターの一番端に座っており、左は壁、右は俺に挟まれている。

なので話しかけるのは俺だけなのだ。なので店の中の男達から早くその席を立て！！

という無言の圧力がかかり始める。

俺は話しかける度胸はないからもうちょっとだけ見させてくれ。

二度とこんな女性見れないかも

しれないから。言い訳を心の中で呟き、ゆっくりと麦酒を飲む。

もう帰ろうかなと思った所で、なんと隣の美女自ら自分に話しかけてきた。

「あの、すみません。恥ずかしい話ですが、私財布を宿に忘れてしまったみたいで。今気付いたんです

。よろしければ3エスほど貸して頂けないでしょうか？すぐに宿に

戻り、お金を持ってきます。  
少々お待ち頂くかもしれませんが、多めにお返ししますので、お貸し願えませんか？」

俺は多少酔っていて、店主に相談すればいいのにと思いつつも心よく了承し、お金を渡した。

詐欺の一種かなとも思ったが、もしそうだったとしても大した被害ではないし、こんな美人

なら騙されても仕方ない。女性は俺の渡したお金で会計を済ますと、すぐに戻ってきますと言って  
急ぎ足で去って行った。店内の人たちはそれを見て、苦笑いしている。

この様子を見る限り詐欺なのだろう。まあ別にいいさ。

「ごちそうさまでした。もし彼女がお金を持ってきたら預かってもらえませんか。

また近いうちに来ますんで」

俺は会計をしながら小粋なジョークを店主に言ったが、真面目な顔でかしくまりました、と返されてしまった。

余韻を楽しむように、月明かりが照らす石畳の小道を歩く。酔いで火照った顔に夜風が気持ちいい。

あそこは明るいが、それで気温が少し高いのだ。道具屋一品のある辺りに差し掛かった時、

前方で男女が言い争っているのが見えた。ちなみに俺は夜目が異常にきくため、明りは持っていない

。男女はそれぞれカンテラを片手に言い合っているが、少し太り気味の中年男性が必死の形相で今にも襲いかからんばかりの身の乗り出し様だ。対する女性の方はロープの帽子で隠れて表情は分からないが徐々に後ずさりしていた。

ん？というかあのロープは・・・

小太り男は足を止めずに向かってくる俺に気付いたのか、カンテラをこちらに向けてきた。

すると女性は俺の顔を見るなり、小走りでこちらに駆け寄り、さも昔からこうやってきたと言わんばかりに俺の腕を両腕で抱き、頭を俺の肩に預け、俺にしなだれかかってきた。

あまりの突然の出来事に固まる俺。

「何度も申しあげたように、貴方とお付き合いする気は毛頭ありません。」

それに、私はこの人と一緒になると決めてますので」

「そ、そんな！撲と初めて会った時は恋人はいないと言っていたではないか！」

「そのすぐ後にこの人と知り合ったのです」

「納得、いかん！！つい最近までは撲たちはうまくいっていたはずだ！！」

「あ、あの一、いったいどういう」

「うまくいっていた、ですか？別に恋人でも愛人でもなかったはず

です。ただの同僚でしょう」

「ち、ちがう！！君は僕とだけ食事を二人でしてくれたじゃないか！プレゼントだってあんなに喜んで、」

「すみません、俺帰っていいですよね？ていうか腕離し」

「あなたとは同僚として食事を一緒にしましたよ。プレゼントも同僚の心配りだと思ってました」

「そんなの納得できない！！僕は、真剣に、君のことを。そうか、この男が君を騙しているんだな。」

この男が君を変えてしまったんだ。でも僕の愛は変わらない！！」

何？なんなのこの昼ドラ。いつの間にか俺も組み込まれてるし。いったい何がどうなって・・・

「そこのお前！！俺はお前に決闘を申し込む！場所は早朝、冒険者ギルド近くの広場だ。逃げるなよ。」

エーリ、君を必ず取り戻す。待っていてくれ」

小太りの中年おっさんがびしっと人指し指を突き出してそんな事を言った。

滅茶苦茶面白い、じゃなくて

「いやいや、おかしいから。だって俺この女の人知らな」

「それで負けたらあきらめてくださいね。私の彼相当強いですから無理だと思えますけど」

それを聞いたおっさんは目に涙を浮かべながら、ドタバタと走り去って行った。

「私のために頑張ってね、ダーリン」

腕をへし折らんばかりに抱きつく美女。先ほど酒場で金を貸した人だった。

心地よい酔いはとくにさめている。

何も悪い事してないのに巻き込まれた(後書き)

続きは今日中に

## 何も悪い事してないのに巻き込まれた2

「別に彼を騙そうとした訳じゃないわ。仕事で色々融通してもらったから、食事の

誘いとか断りずらかったのよ。贈り物は、まあ、高価だったんだけど、私個人の魔法研究には結構

重要な物で、手に入りづらいから受け取っちゃったの。

それもあって彼の好意を無碍に出来なくて。で、ついさっき貴方に借りたお金を返すために

宿に向おうとしたら、突然血相を変えた彼が出てきて、

僕というものがありませんから一人で酒場に行くな、ですって。

勘違いも甚だしいから、あなたはいい人だけど、男として見れないって言ったんだけどね。

後は貴方も知っての通りよ。と、ここが私の宿よ。すぐにお金持ってくるからここで待っていて」

そう言っただけで彼女、エーリは宿の中に入っていった。俺は入口の脇に背中を預け、ため息をつく。

エーリはかなり珍しいフリーの魔術師だ。エスケンス王国軍が戦略用大規模魔法の研究を

ここ、オズマンで行っており、その研究の助手として短期間雇われていたらしい。

俺に決闘を挑んできたおっさんの名前はオド。

エスケンス王国軍の魔法部隊の隊員であり、今回の研究の責任者をしている。

ちなみに実績をたたえられて爵位まで与えられているという。

エーリは宿に着くまで俺の腕を絶対に離さなかった。

まるで恋人のように口を俺の耳まで持ってきてこうささやく。

「あなたが逃げたら私は貴方に付いていくわよ、どこまでも。彼しつこいから、延々と追っ手を差し向けてくるわ。それに貴族が決闘を申し込んだら、決着をつけないと面子が立たないからうやむやにもできないわ」

ホントに居るんだな、魔性の女って。

しばらくすると彼女は小さい革袋を持って宿の入口に戻ってきた。

「お待たせ、はいお金。助かったわ。それと、タダってわけにもいかないから、こっちは依頼料  
つて事で」

貸した3エスを返してもらった他に、革袋ごとジャラッと渡された。(ちなみに彼女は詐欺でもなんでも無く、本当にお金を忘れていたらしい)

中をのぞくと銀貨が6、7枚。黄貨が3枚。銅貨が30枚はある。

それを彼女にそぐざに投げて返す。受け取ったらやらざる負えなくなる。

決闘を申し込まれた時点で手遅れのような気もするが、俺は最後まであきらめない。

「あの、なんで俺なんでしょう？俺は、今日初めて依頼を達成した冒険者、初心者なんですよ。」

他の奴に頼めませんか？貴方が頼めば引き受けてくれる人いますよ絶対」

「ふふ。私これでも昔は冒険者をやっていたの。わかるのよ。貴方は若いけど、その腰に差している物は飾りじゃない。かなりの使い手ね。体の一部になってる。しかもあなたは自信にあふれている。

自分の剣は負けない、ましてやあんな男に敗れる訳は無い。ただ相手が貴族だからめんどくさい。

どう？合ってるでしょう？あなた顔に出やすいわ。」

俺は思わず自分の顔を手でなぞってしまふ。エーリはそんな俺を見てクスリと笑う。

「ごめんなさいね、変な事に巻き込んでしまつて。でも頼めそうなのがあなたしかいないのよ。

オドは貴族だし、軍の魔法研究のお偉いだから同僚には頼めないし、それなりに腕が立つ人で、

しがらみがなく、そして、お人好しな人。私は貴方しか心当りないの」

「もしかして酒場での事は俺を試すためですか？」

「違うわ。あのときは本当に忘れたの。そのあとあなたが偶然通る道でオドと揉めたのも偶然」

悲しそうに、すまなそうに大きな瞳を潤ませて、上目づかいでこちらをのぞくエーリ。

覚悟を決めて、明日決闘を受けるしかないのか。まあ、相手を見た限り、接近戦は出来ないだろう。

恐らく魔法でくるはずだ。魔法は体内の魔力を外に出し、術を決めて、放つ。

頭で想像して発動というとても便利なものだが、発動まで隙が大きいため、その間に間合いを詰めて気絶させれば問題ない。

それに、目の前でエーリがどんどん瞳に涙を溜め始める。

「わかった、わかりました！やりますよ。どうせ顔を見られてるから逃げませんし！」

エーリはぱあつと顔を明るくすると、俺の手を取ってお金の入った革袋を両手で包むように渡す。というか、ぎゅつと握って離さない。

「あー、エーリさん。離してください」

エーリは目を潤ませたまま、スウツと妖しく細め、微笑を浮かべる。大きく突き出した胸を

俺に押しつけ、口づけをせんとばかりに顔を近づけてきた。そしてかろつじて聞き取れる位の声でささやく。

「ねえ、お礼はホントにこれだけでいい？私の部屋に来て。もっとお礼するわ」

オドさん、あなたの気持が少しだけ分かりました。

何も悪い事してないのに巻き込まれた2 (後書き)

お待たせしてすみません  
続きは明日か明後日には

何も悪い事してないのに巻き込まれた3 (前書き)

お待たせしました。

### 何も悪い事してないのに巻き込まれた3

エーリの悪魔の誘惑を振り切り、悶々とする感情を押さえつけて就寝した。

そして、俺はオドの指定した場所へと重い足取りで向かう。

噴水のある石畳の広場には、オドがすでに待っていた。

「逃げずによく来たな。君の事は少々調べさせてもらった。

つい最近冒険者になったばかりで、ここに来たのもつい2、3日前。

どういった経緯で彼女と仲良くなったのかはしらんが、それよりずっと前から、私とエーリは

愛を少しずつ育んできた。それを邪魔されたのだ、私が怒るのも無理はあるまい」

俺の姿を見るや、憤怒の形相でにらみつけ、まくしたてるおっさん、もとい、オド。

彼はシミ一つない真っ金キンのローブを身にまとい、自身の身長より10センチほど高い、

うねっている黒い木の杖をついている。予想通り接近戦は行わず、

魔法の遠距離攻撃で一気に決めるつもりなのだろう。

オドはいかめしい顔をしながらゆっくりとこちらに歩み寄る。

エーリにエスケンス王国での決闘のルールを聞いたところ、ほぼなんでもありで、毒を盛ったり

、本人同士以外の加勢以外は決まり事が無いらしい。

俺とオドの距離は6メートル。オドが魔法の発動をしていない今なら、余裕で対処出来る

だろう。しかし、どうしてもオドに言っておきたい事がある。

「オドさん。この際だからはっきり言いましょう。あなたはあの女に騙されてる、と思います」

その言葉にオドはビクツと体を震わせたが、

「ふん。そんな嘘で私は騙されない。ヨウイチ・サキとやら、どこ  
の没落貴族か分からんが、  
今ならまだ間に合うぞ。私はエスケンス王国オド・アキナウエル伯  
爵だ。魔法研究の第一人者  
でもある。しかし君はただの冒険者。悪い事は言わん、降参しろ。  
彼女から手を引けば悪いよう  
にはしない」

偉そうに突き出たお腹を揺らしながらしゃべるオド。

だめだこのおっさん。聞く耳持たずとは正にこの事か。もしかしたら騙されていたのには薄々  
気づいていたのかもしれないが、恋は盲目と言っし。

さらにオドが何か言おうとした時、エーリが小走りで駆け寄ってきた。  
きた。

それをオドは目ざとく発見し、目をキラキラさせて、慌てて薄く  
なった頭を一生懸命  
手櫛でなでつけている。

オドは本当にエーリに惚れているのだろう。無理は無いのかもしれない。  
れない。

エーリは昨日の黒いローブではなく。町娘のような白のワンピース  
だった。

昨日の彼女は蟲惑的な悩ましい色香を発していたが、今は長い豊かな黒髪を後ろで束ね、健康的で清純な雰囲気か漂っている。しかし豊満な胸は隠さず、襟元から谷間が見える。

真つ白な肌は走ってきたせいかなほんのりと赤く、動悸を抑えるために手を胸に押しつけて、息を荒げている。早朝から大通りで働いている男性たちは、全員彼女を見ていた。

彼女は、そんな周りの視線を無視し、オドは視界にすら入れず、まっすぐ俺に駆け寄ってきて、身体ごと胸に飛び込んできた。

「ごめんなさい！！私のせいでこんな事になって・・・でも、勝つて。」

私のために！！（目に涙を浮かべた迫真の演技）

「ウン、ボクガンバルヨー。キミノタメニ（超棒読み）」

ああ、オドがすっごい表情してる。般若みたいになってる。

俺にだけ聞こえるように小声で、負けたらコロスとエーリはつぶやき、

そそくさと噴水の脇へと避難する。

憎悪の念を向けてくるオドに、俺は不思議と怒りを覚えなかった。むしろ、憐れみすら覚える。

「ふ、ふん。私がここで勝ち、誠心誠意接すれば、エーリは目を覚ます・・・」

いざ、尋常に勝負・・・」

黒い杖を片手で俺に向けて宣言するが、杖が重いのか、腕がふるふる震えている。

気は進まないが、剣を抜いて、両手で握り、下段に構える。

おそらく立会人なのだろう、オドと同じ金色のローブを着た若い男が、エーリのそばで

こちらを見ていた。

オドはプルプルとさせていた腕を降ろし、なにやら懐をござとさせて、黒い石を取りだした。

それは手の平程の大きさで、真黒な色をした水晶だった。石の中心が時々、青い光で明滅

している。オドは俺の顔を見ると、ニヤツと笑った。なんだか嫌な予感がする。

それを見たエーリが後ろから声をあげた。

「オド！！あなただって人は・・・魔法を使えない人に、いえ、使える人でもひとたまりも

ないわ！やめなさい今すぐに！！決闘に使うものではないわ」

えっ、あれそんなにやばいの？

「ふふ、もうおそいわ。私のありったけの魔力を事前に注ぎ込んである。

これで、エーリは私のものだあああああああああああああ

オドは叫びながら黒い石をこっちに投げつけてきた。俺の頭上に差しかかった時、

それは一瞬、目が眩むような光りを放つと、消滅した。  
不発？怪訝に思っていると、俺の体にすさまじい衝撃が走った。

ヨウイチの居た場所に、野太い光りの柱が二度、降り注いだ。  
遅れて体に衝撃を伴う程の轟音が鳴り響き、石畳の床は捲り上がり、  
土煙りがモクモクと舞っている。

充分離れていたエーリも音の衝撃でよろける位だ。幸い、エーリ  
も立会人も壁　ウォール  
の魔法で余波を防いだので被害はないが、辺りは騒然となっている。

当たり前だ。早朝に特大の雷が二度も人に落ちたのだ。  
土煙りでオドとヨウイチの姿が見えない。焦げ臭いが辺りに漂う。

「おいおい、いったいなんだってんだ？」

「決闘だってよ。でも魔術師がいきなり雷おとしやがった」

「それ決闘にならねえじゃねえか。相手は真黒焦げだな」

「どうせまた貴族同士のいざこざだろ。いい迷惑だ」

「おいおい、そんな言い方ないだろ。少なくともレンガ職人の俺に  
補修の仕事が  
入ってくる」

「はは、違いねえや。ま、巻き込まれさえしなきゃどうでもいいわ」

周りの住民は怪訝そうな顔をしながらも、各々の仕事に戻っていた。

エーリは絶句していた。まさか、オドがここまでやるなんて想像していなかった。

彼は大規模魔法研究のエリートだが、戦闘をやった経験はほとんどないはずだ。

オドがもたもたと魔法の起動をしている隙に、ヨウイチは間合いを詰めて、殴るなりすれば終わると思っていた。

しかしオドは、純度が極めて高く、大きな雷結晶にあらかじめ魔力を込めて、起動準備時間ゼロ、威力は天然の雷と同等、しかも二連続を容赦なく、魔法が使えない者に叩きこんだ。

あれは熟練の魔術師が自身の魔力と、地脈の魔力を使い、風、水の二つの属性を自在に操って初めて出来る大技だ。ましてや二連続、即座に発動できるのはあの雷結晶のおかげだろう。

あの位の雷結晶は滅多に出るものではなく、いくらお金があっても手に入れるのは難しい。

オドの地位があつてこそそのものだろう。それにしたつて、一人ののために一瞬で使い切つてしまった。他の魔術師がこの場にいたら卒倒してしまうだろう。

横に立っていた立会人であろう魔術師は事前に行っていたのか、涼しい顔で平然としていた。

我に返ったエーリは、未だに土埃で見えないヨウイチを助けるために駆け寄ろうとした。

それを察知してそばにいた魔術師が肩を掴み、エーリを制止した。

「いけません。まだ決着はついてないですよ」

「何を言ってるの。あんなの喰らって平気な奴なんていないわ！もしかしたらかるうじて生きてもいられないわ。早く助けないと」

それでも肩を離そうとしない魔術師にいら立ち、股間を蹴り上げてやろうかと思つた瞬間

剣をビュツと振る音がしたと同時に、舞っていた塵がフワツと横に流れ、人の影が見えた。

次第に視界が晴れて、オドの驚愕の表情と、

ヨウイチの後ろ姿がエーリの目に飛び込んできた。

「ゲホツゲホ。あーやばかった。あとちょっと遅かったらどうなっていた事か」

あの光りが消滅したあと、頭上付近に強力な力が急激に集まるのを感じ、とっさに体内魔力循環で全体を覆い、抵抗した。幸いにもかすり傷一つなく、身に付けている外套の先っぽがわずかに焦げている程度だった。やはり身体から離れ過ぎていると体内魔力循環の影響が弱いらしい。なにせ強力な魔法を身に受けたのは今回が初めてだったので、

どの程度対抗できるか分からなかった。

「な、な、なんであれを喰らっていきっている!？」

オドは額からダラダラと汗を流し、金魚のように口をパクパクさせている。

「で?まだやるんですか?」

俺は喋りながらオドの元に歩いて行き、のど元に剣を突き付ける。

オドは未練たらしく、俺の後ろで目をひんむいているエーリをちらちらと見て、

のど元の剣に視線を落とすと、

私の負けだ　と言って杖を落としてしまった。

するとエーリの隣にいた魔術師がこちらに聞こえるように俺の勝利宣言をした。

終わった。一瞬死ぬかとも思ったが、無事だった。きゃっほー！！

何も悪い事してないのに巻き込まれた3 (後書き)

パソコンがウイルスを貰いました

2日ほど知り合いに修理で出す事になりました

みなさんもエロサイトには気をつけてください

私は別にエッチな画像が見たかったわけじゃないんです  
本当です

って言ってる間にもう仕事の時間

これサイバーパトロールの辛い所ね

魔法 魔結晶（前書き）

お待たせしてすみません

## 魔法 魔結晶

敗北を認め、がつくりとうなだれるオドにかける言葉は、自分には無かった。

敗者が勝者から慰めの言葉をかけられたらみじめだし、キレて何かされたらたまらないし。

俺は剣を鞘に納め、踵を返してエーリと立会人の魔術師の元へ。

目を見開き、俺を茫然と眺めているエーリを無視して、立会人と対面する。

「まあ、俺が勝った訳ですけど、あの、ここの広場の修理代って・

」

「大丈夫ですよ。オド伯爵は貴族で、貴方は名字持ちとはいえ、平民。

ここで貴方に修理代を折半しろだのと請求したら、貴族として生きていけません。

そついうのはすさまじい速さで周りに広まりますので、オド伯爵もそこはわかって

おりますよ。なにより、彼は負けたのですから。安心してください。

エーリ嬢にも二度と求婚はしないでしよう。もしなにかありましたら立会人を請け負ったこの、

・

エスケンス王国マードブル領主 セウス・マードブル侯爵に申しつけください」

セウスと名乗った金髪のイケメン好青年は侯爵だった。侯爵は伯爵よりも地位が上だ。

しかも領主。なんでこんな所でこんな事やっているのかは分からないが、オドはセウスの顔に泥を塗るようなまねは出来まい。

「しかし、いったいどうやって先ほどの大魔法を防いだのですか？壁 ウォール を展開

したようには見えませんでしたし、避けたようにも・・・貴方が微動だにしないで立っていたのは分かったのですが」

「・・・私も是非、聞きたいわ」

なぜか二人ともすごく厳しい顔をして俺に詰め寄ってきた。そんなにすごいのか？

「いや、ただ全力で体内魔力循環をやっただけですけど」

「はっ？」

・・・なぜか、こいつ頭大丈夫か？といった憐れみの表情を浮かべられる俺。

「だから、ありったけの体内魔力を、体全体に、一気に巡らせて、覆ってしまうんです。

体内魔力循環ってそんなに知られてないんですか？」

俺がそう言うと、二人は沈黙してしまった。これはもしかしてまずい事を言ったのかもしれない。

すると、まるで俺など居ないかの様にエーリとセウスは会話を始めた。

「ありえないわ。確かにそういう技術はあるけど、あんな威力を完全に防ぐなんて。

大体、体内魔力だけで超密度の壁を体全体に施せば一瞬で魔力切れでぶっ倒れるわ。

一般の魔術師の10倍は魔力保有量のある私でもすぐに底をつく。そもそも大魔法を防ぐ程の密度だったら手のひらサイズを一瞬だけ作ればいい方」

「純粋な体内魔力で、ですからね。地脈を使うなら事前に膨大な儀式と下準備がかかります。

どんな魔術師でもたった1日で出来るわけがない。

それに、そんな事をするなら集めた魔力で大魔法を先制すればいい。わざわざ防御に使うなんて

リスクが大きすぎます。

まあ、地脈から集めた膨大な魔力を体に取り込んだらその時点で吹き飛びますけど」

「じゃあ、一度体内魔力循環を行った後、それを壁ウォールなどの防御系魔術に瞬時に変換させた」

「無理ですね。あんな一瞬で魔力を変換させて顕現させるなど。身体全体ですよ？」

魔法の発動プロセスは

体内の魔力を手の平に集める 集めた魔力を手の平から出す 外に出た魔力の塊に顕現させたい

魔法をイメージを込める 魔法発動

これをいくつか簡略化できてもあの一瞬でノーミスは無理です」

「そうよね。それに私も貴方もヨウイチが何かの魔法を使った瞬間も形跡も感知出来なかった」

「彼の装備には大魔法を防ぐような付与魔術は無いようですし、超回復の治癒魔法、なわけ無いですね。それこそ死者蘇生が可能になってしまいます」

「これはヨウイチを調べるしかないわ。もしかしたら魔法の歴史が変わるかも」

「私も大いに興味をそそられます」

エーリとセウスがヨウイチの方に向き直ると、

そこには誰も居なかった。

なにか嫌な予感がした俺は、彼らが議論している横を通り過ぎ、

道具屋一品に向かっていた。

地面に膝を着いていたオドはしばらく議論しているエーリを切なそうに眺めた後、肩を落として

トボトボと去って行った。哀愁漂う背中、なぜか俺の眼頭が熱くなった。

道具屋一品に入ると、相変わらず店主はむすっとした顔で椅子に座り、三毛猫を乗せていた。

「お前か。バカ息子からの伝言だ。ムブラ村に行く者に、ガーウルフを始末したと、伝えるよう伝言を託した、と言っていた」

「ああ、わざわざすみません。イスランさんが帰ってきたらお礼言わないと」

「そういえば村の有志を募って討伐するって言ってたな村長。少しでも早めに伝えた方が喜ぶか。」

「収穫祭まではまだ日にちあるからそれまでにムブラ村に行けばいいかと思ってた。」

「ふん。で、何をしに来た？話をしに来たのではあるまい」

「ええ。実は、結晶を探してまして。あ、買うかはちょっと考えるんですが。」

「どういった物が知っている人から色々聞こうと。もちろん情報を提供して頂けたら、」

「お礼はします」

「礼はうちの店をひいきにすればいい。というかそんなこと当たり前」

前だ。  
いちいち言わんでもいい。ちょっと待ってる。魔結晶なら何個がある」

結晶で通じてよかった。魔結晶って言うのか。

店主は手のひらほどの小箱を二つ持ってきた。銀色で、頑丈そうな錠前が付いている。

それを木の机に置くと、椅子に座る店主。

無言で俺の顔を見て、顎で俺の前にある椅子を指す。座れて事か。失礼します、と言って座る俺を店主が黙ってうなずくと、懐から鍵の束を取り出した。

腕輪程の鉄の輪に数え切れないほどの大きささまざまな鍵がじゃらじゃらと着いている。

その中から迷いもせず二つの小さな鍵を選び、錠前に差しこんで小箱を開け、  
開けた小箱をこちらに向けてる。

「お前は魔結晶についてどれだけ知っている？魔術師でもないのに結晶が欲しいなど、  
新米冒険者が言うのだからあまり知らないと見たが」

「すみません。ほとんど分らないです。楽に強力な魔法が発動出来る

物があればなにか役立つのではと思って。初級魔法しか使えないし、それもすごい苦手で」

「ふむ、剣士のくせに魔法が使えるのか。変わってるな。そういうことなら、お前にこれは  
無用の長物だ」

予想していた答えとはいえ、ちよつとショック。先ほどのオドが使った大魔法級とまでは  
いかないが、強力な魔法を使ってみたかった。たとえば剣が通じない相手とか、空に逃げた  
魔物を打ち落としたりとか、緊急時に役立つと思っただが。

視線を店主から小箱に移す。小箱の中にある透明な丸い石は二つとも親指ぐらいの大きさだった。

一つは透明な水晶で、中心に水が入っていた。

もう一つは白く濁った水晶で、雲のようにその濁りが水晶の中をゆったりと移動している。

「いいか、魔結晶は、火、水、風、土の属性を持つ石の事だ。地脈から漏れた魔力を吸収した

石が、それぞれの土地の特徴で変化すると、魔結晶が出来る。まあ、ごく稀に二つの属性を持った石や、属性に染まらない石もあるが、ほとんどはこの四属性だ。

魔結晶は、加工した時に出る削りカスや、結晶とは呼べない程に小さいものは

平民達が仕事で使ったりもする。しかし、お前の言う、魔法に使う魔結晶と呼べる程大きな

結晶はおいそれと出ない。使い道は主に魔法の研究や、国の正規軍の戦艦の動力等で、

個人が魔法を発動させるために使うなどまずしない。中級魔法一回で消滅してしまう物だから

割に合わない。確かに、結晶は魔力を流すだけで発動するが、それほど大きく時間や手間が

省かれるわけではない。まあ、知っておいて損はない。水の入っているのは水結晶。



魔法 魔結晶（後書き）

遅くなって本当に申し訳ない

今後はあまり大きく間隔を開けないようにします

ウイルスは無事除去出来ましたが、もうこのパソコンはおじいさんだから休ませてあげたら？と言われました

俺は苦樂を共にしたこいつと別れたくない！！

パソコン買う金無いだけ

**難易度？（前書き）**

どんどん設定が増えていきます  
いらぬ細かい設定ばかりが  
これだから行き当たりばったりは  
だれだこんな小説考えた奴

難易度？

決闘を終えた次の日。俺は冒険者ギルドに早朝から足を運んでいる。

ギルドの中は今日も閑散としていた。さっそく難易度？の掲示板に行き、依頼をしてみる。

おととい見た時と同じくらい依頼の紙がコルクボードに貼らさっており、数は全く減っていない。

一枚一枚見ていては日が暮れてしまうので、報酬がよさそうなのを目安に探してみる。

呪い付きの鎧運搬 300エス・・・妖しいのでパス。

浮気相手の女性をつきとめて 200エス・・・修羅場に巻き込まれるのは嫌だ。

商人の護衛（若い女性のみ） 1000エス・・・欲望に忠実すぎ。

ひと目ぼれをした女性の探索 100エス・・・自分でやれ。

碌な依頼が無い。やはり低ランクで高報酬は望めないか。

そついえば一個上の難易度なら依頼を受けられるって言うていたな。さっそく隣の難易度？の掲示板へと移動する。

難易度？はざつと見たところ、最低でも80エス、高いのは2、300と言ったところか。

その中にも1000エス以上の依頼があったが、先ほどと同様にきな臭い依頼ばかりだった。

適当に重なっている紙をペラペラ捲っていると、採取という文字が書いてあった。

依頼主 薬師協会

ビルマ洞窟での薬草採取 冬虫夏草5キン、耳キノコ、20キン  
依頼を受けてから10日以内に

報酬120エス 洞窟内の青コウモリの羽を取ってきて来れば一  
枚1エスで買い取ります。

なお、品は直接薬師協会オズマン支部まで運ぶこと

難易度？

ビルマとはビルマ湖周辺の事だろうか。ならば近くていい。薬草は森に住んでいたから分かるし、青コウモリは大した魔物ではないので大丈夫だろう。青コウモリに噛まれるとすぐに身体全体がしびれ、動きが鈍くなる。それだけなら命の危険はないが、動けないところに大量の青コウモリが殺到し、血を大量に吸われてしまうので普通の人は恐れる。自分は毒の耐性が強いいため、万が一噛まれてもなんともない。これは実際に試した事がある（エスクジいさんに無茶苦茶怒られたが）ので確実だ。依頼書をはがし、受付に持っていくと、

いつもの人ではなかった。

黒い紙に手を置き、本人確認を済ませ、依頼書を手渡すと受付の人は眉根を寄せた。

「ヨウイチさんは、ランク1の依頼を初めてこなしたばかりですね。確かに難易度？の依頼を受ける事は可能ですが、もう少し経験を積んでからの方がよろしいかと。」

依頼をこなしても、次のランクに上がるのが早まるわけではありませんし

ビルマ洞窟はとりわけ青コウモリの生息率が高いです。

油断して死亡する冒険者も少なくないんですよ」

やはり言われたか。確かに普通ならそうだろう。しかしどうにも今のランクだといまいちやる気が出ない。もっとこう、遺跡に入ったり、宝を探してみたいのだ。

「俺は森で長年暮らしていたので、薬草の知識がありますし、青コウモリなら慣れています。」

少々嘸まれても平気なくらいには」

ううむ、と言って受付人は少し悩んだ後、いいでしょうと言ってペンを俺に差し出した。

「では、ここにサインを。はい、結構です。くれぐれもご注意を」

無事依頼を受けられた。ビルマ洞窟の場所を知らないので受付人に聞いたところ、

ビルマ湖からさらに北に一日程歩いた所にあるという。

まずは山羊亭で食糧を分けてもらおう。

昼頃にはビルマ湖に着き、漁師たちが使っている樽を勝手に拝借し、テーブルとイスにして

湖を眺めながら昼飯を食べている。

漁師たちは今全員で盗みを図った村に向かっていている頃だろう。無事に解決している事を祈る。

どのくらい歩いただろう。すでに日は落ち、辺りは闇に包まれている。

時折狼の遠吠えや、鳥の鳴き声が辺りに響く。

豊かな草木に恵まれた土地で、時折小川のせせらぎが聞こえる。

普通なら夜間の移動は危険なので朝まで休むのだが、自分は大変夜目がきくし、

2日3日歩き続けても平気だ。なので夕食を取ってすぐに移動を再開した。

首都から洞窟まで大体3日ほど。依頼は10日以内なので余裕だが、早く終わらせてベットと、暖かくて美味しい料理が恋しくなるのでなるべく早く終わらせたいところだ。

ビルマ洞窟は道の脇にぽつとある小さな洞窟の事で、道の側面に岩肌が多くなってきたと思ったら、突然ボコボコとたくさん穴が等間隔で空いており、亀裂が広がって出来た穴や、人が掘った少し大きめの穴が無数にあった。

雨風でボロボロになった看板には ビルマ洞窟群 コウモリ注意  
と書いてあった。

どこの穴とは指定されなかったので自分で探すしかないだろう。昨日は夜通し歩き続けたので朝方には到着しており、夜行性の青コウモリが活発になる夜中までに終わらせてすぐに帰る予定だ。

とりあえず一番近い穴に入り、どの程度なのか確認するでしょう。一番最初に入った穴は1メートル程しかなく、耳キノコがわずかにある程度だった。何箇所か探索したが、どれも大した奥行きが無く、少量の耳キノコが採れるだけだ。

耳キノコはウサギの耳のように細長い傘が特徴で、食用であると同時に乾燥させて粉状にすると解熱剤として使われている。日の当らず、湿気が多い

場所で繁殖する。

どこにでも生えるのですぐに集まると思っていたが、誰かが採ったばかりのようで、

今の所10キ程しか集まっていない。ちなみに1キンは大体青銅貨1枚位の重さの単位

だが、一般では手のひらいっぱい分とか、袋一つ分といった具合で取引する。

もつと採取しづらいのは冬虫夏草。

これは土の中の昆虫に寄生するキノコで、成長速度が遅いため、少量しか採れない。

しかし、地脈の魔力の近くにあるものは成長もはやく、大きな物が採れる。

ここビルマ洞窟も周囲に地脈が走っており、よい薬草採取場になっているらしい。

これも未だに一つしか見つけておらず、あと5つ採取しなければならぬ。

昼休憩をはさみ、午後も探索を続けているが、まだすべてそろっていないかった。

耳キノコは大きめの革袋に満杯になるまで採れたが、冬虫夏草は今までに2つ。

正直見通しが甘かった。他にも採りに来る人はいるはずなのを全く考えていなかった。

洞窟内は非常に狭く、人ひとり分の幅しかなく、ところどころ身体を横にしなければならず、

そんな中に長時間こもり、徒労に終わり、また別の洞窟に入るという作業は、

肉体的には平気だが、精神的にきつい。

日が暮れてきた頃には冬虫夏草が4つ集まった。後二つ。完全に日が落ちても数がそろわなかった場合は中断し、明日の朝やればいい。十分間に合う。青コウモリを相手にするのは大した事ではないが、数が多いとうんざりするので夜の探索はなるべく避けたい。

「あつた。あと一つ、冬虫ちゃんあと一つ」

日が完全に落ちてしまった直後に一つ発見し、残り一つとなった。なんだかずつと一人で真っ暗な中にいると無意識に意味不明な言葉を発していた。

本能的に恐怖をごまかしているのだろうか。

「どうしよう。残り一つだけど、続けようかな」

最初に入った所から大分離れた穴は、入口は狭いが奥が深く、100メートルほど進んでもまだ先があつた。分かれ道が無数にあり、これ以上は迷子になった場合を考えて進むのはやめた。それに分かれ道の手前は少し開けており、地下水が漏れているのか一番ジメジメしており、色んなキノコが自生している。ここならすぐ見つかりそうだ。

今まで2匹の青コウモリが出てきた位で問題はない。続けること

にしたのだが。

異変に気付いたのは最後の冬虫夏草を見つけ、ナイフで土を慎重に掘っていた時だった。

洞窟の奥から3匹の青コウモリのバタバタと飛んできて、襲ってきた。

とっさに持っていたナイフを後ろに跳躍しながら横に振る。

一匹が胴体を裂かれ地面に落ち、しばらくバタバタとのたうちまわると静かになった。

残りの二匹が自分の頭上を旋回して、左右から挟むように急降下してきた。

ナイフを瞬き一回分程の早さで上空に二度の突きを繰り出し、正確に刃を青コウモリの

胴体を突き刺した。刺した勢いで血を噴き出しながら前方に投げ出される青コウモリ

おかしい。今の攻撃は連携が取れていた。正面から突撃し、すぐに頭上から挟撃してきた。

青コウモリにそこまでの知性はない。偶然か。別の魔物かとも思っただが、ダークブルー

の毛は確かに青コウモリのものだ。大きさも普通のコウモリの2倍程。格別大きいわけではない。

地面に転がっている死体を見ながら黙考していると、また羽音が聞こえた。

先ほどと同じく、複数のコウモリが羽ばたくバサバサという音と、もう一つ。

ドシ、ドシ、という何者かの足音。まさか他にも人が？

奥の別れ道の一つから、ぬっとそいつは顔を出し、俺をギロリと睨みつけ、こちらにゆっくりと近づいてくる。

睨みつけた目玉は四つ。顔横一列に黒目だけの目玉が四つ並び、耳の後ろまで避けた口

は、ナイフが無数に生えているような牙を生やし、よだれをたらしながらその牙を俺に見せつける。

腕の下にはコウモリと同じく薄い膜が生えており、手の指の爪が異常に伸びている。

体中黒い毛で覆われているが、頭部の大きい耳だけは毛が無く、血管が薄く透けて見える。

コウモリ男。自然とそんなことを思った。もちろんそんな魔物がいるなんて聞いた事はない。

ただ、筋骨隆々な男とコウモリを半々で割ってくっつけたようだったから。

俺は近づいてくる化け物を前に、固まっていた。10メートル程まで近づいてきても俺は動かない。いや、動けない。

「ギツギギイイイ！！！！！！」

後ろに無数の青コウモリを従え、近づいてくる化け物。

俺はこの時、初めて本当の恐怖を感じていた。



## コウモリ男

異様な姿に俺は飲まれていた。

四つの黒い目玉には金縛りの効果でもあるのかと疑ってしまう。

動かない。足が地面に根を張ったように微動だにしない。

握っているナイフは小刻みに震え、瞬きが出来ずに、化け物が近づくの待っているしか出来ない。

バタバタと怪物の周りを飛ぶ青コウモリは目に入らなかった。音だけが脳に響き、視界には

怪物しか映らない。コウモリと人間を足したような怪物は丸太のように太く、毛深い足で

ゆっくりと洞窟の狭い中を進み、俺の目の前まで迫ってきた。

俺が手を伸ばせば、その異様な身体に触れられるほどまで接近してきた。

青コウモリが腕や足、首に噛みついてきた。チクリという微々たる痛みが連続するが、

気にもならない。目の前の怪物に比べれば。

このコウモリ男とでも言うべきような怪物は、近くに来た途端に濃い血の匂いを

まき散らす。体中の毛深い体毛には血が乾いてかさぶたのようにいくつもこびりついていた。

一体どれだけ血を飲んだのか。あるいは帰り血を浴びたのか。

コウモリ男はひだの付いた腕を無造作に横に振り、俺の体に叩きつける。

無意識に両手を身体の前で交差させ、ガードをする事に成功した

が、  
今まで地面に根を張っていた両足がいとも簡単にはがされ、洞窟の壁面に叩きつけられる。

ガードが間に合ったのは、体術が無意識で反応できるようになるまで叩きこんだからだ。

エスク爺さんありがとう。しかし、ガードした両腕はビリビリとしびれ、叩きつけられた

背中はずきずきと痛み、うまく呼吸が出来ず、コウモリ男の腕と壁に挟まれながら

金魚のように口をパクパクとさせるしかなかった。

ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！

こんな狭い洞窟内じゃ満足に剣は振るえない。ナイフはさっきの攻撃でコウモリ男の背後に

吹っ飛んでしまった。たとえナイフが手元にあってもけん制程度には使えそうだが、

倒せるとは到底思えない。

何とか押さえつけている腕を押し返そうと身体に力を込めるが、びくともしない。

まるで鉄の棒のような固い腕は、さらに俺を壁にめり込ませるかのようになりに力を入れてくる。

これ以上圧迫されないようにするだけで精いっぱい。とても押し返せそうにない。

コウモリ男は押さえつけている腕はそのままに、もう片方の腕を頭上に大きく振り上げ、

俺の頭に勢いよく振り下ろした。

風を切るような音とともに、金づちで殴られたような衝撃が頭に

響き、俺の視界は  
グラグラと揺れた。

腕が頭上に振り上げられると同時に体内魔力循環を行い。体内魔力操作で首から上に  
魔力を集中させたおかげで首が折れる事も、頭が破裂する事も無かった。

間に合わなかったら即死亡。そんな攻撃がさらにもう一度襲ってきた。

巨大地震でも起きたのかと思うくらいの振動が身体全体を駆け巡り、固い地面に叩きつけられた。

頭がグラグラと揺れ、起き上がるうとするが、平行間隔がなくなっているのか身体を起こしても  
尻もちを着いてしまった。

コウモリ男は無様に地面を転がっている俺に攻撃をせず、口を大きく開けてズラリと並んだ  
牙を俺に見せつけた。

こいつは獲物をいたぶって遊んでいる。森でも大型の動物が獲物を生かさず殺さず遊んでいる  
のを何度も見たことがある。こいつも俺で遊ぼうとしている。殺すなり食べるなり、  
今まで何度もチャンスはあったはずだ。

舐めやがって。沸々と怒りが湧いてきた。大丈夫だ。俺ならやれる。

あの超敵しい、正に地獄のような修練を耐え抜き、ガーネット流を修めたこの俺が、  
ちよつと見た目が怖くて力が強いだけのコウモリ男に負ける筈がない。

大体、エスクじいさんに比べればさっきの攻撃なんてぬるい。

魔力でガードしても一発で失神させられるあれに比べれば。

コウモリ男は油断している。地面にへたり込んでいる俺にゆっくり手を伸ばし、掴もうとしてきた。

毛むくじゃらで、筋肉でポコポコな野太い腕が俺ののどを掴もうとした瞬間、

その腕を右手で脇に抱え込み、俺の全体重を後ろにかける。コウモリ男は予期していなかった事にバランスを崩し、上半身が前のめりになり、無防備な状態になる。

一気に魔力をおぼつかない両足に流し、無理やり地面を蹴り出して、相手の懐に飛びだし、勢いそのまま、左ひじをみぞおち辺りにめり込ませる。

人間だったら内臓破裂で即死だが、コウモリ男はよだれを垂らし、て呻くのみ、

さらにめり込ませた左ひじを引くと同時に右手の掌底を下がった顎に真下から真上に突きあげる。

ガチンツッ！という音が洞窟内に響きわたる。

今で顎を粉々に砕くつもりだったが、やはり耐久力が違いすぎる。

しかし、頭が揺れたのか両手で頭を抱えてブルブルと振っている。

チャンスだ。洞窟内は俺にとって不利だ。今の内に外で迎え討つ。

まだ身体はぎくしゃくとして、普段の3分1程の速度しかでないが、走れる。

コウモリ男に背を見せるのは嫌だが、このまま戦っては勝てるかどうかかわからない。

必死で出口を目指す。

幸いすぐには追って来ず、息を整える位の余裕があった。予想以上にダメージがあったのか、  
コウモリ男は若干ふらふらしながら外に出てきた。

四つの黒い目玉を眩しそうに細める。

今は夜中だ。日は全く出てないが、それでも月明かりでも眩しそうにしている。

そして、出口のすぐ脇の木の下で剣を抜いて構えている俺を見つけると、

「ギ、ギツギギギイイイイ!!」

のこぎりで金属を削るような鳴き声をあげて俺に飛びかかってきた。

その脚力は相当なもので、足の筋肉は飾りではなかった。

3メートルの距離を助走なしでこちらに跳躍し、俺の頭上3メートルまで飛びあがる。  
ちよつと満月を背に、異様な怪物が腕を広げ、牙を剥いて落下してくる。

場違いだが、その姿は恐ろしくもあり、美しくもあった。まるで物語のワンシーンのように。  
そしてそれを退治する主人公は、自分だ。

剣を肩に担ぎ、左半身を前に顔は頭上のコウモリ男に向ける。  
カミソリのように鋭い無数の牙をむき出しにして、それは上から降ってくる。

上から俺の顔によだれがポタツと振ってきた。

気にならない。後ろから青コウモリが襲いかかってきた。  
バタバタとうるさい。

どンドン自分の周りが静かになってゆく 後ろの羽音が聞こえない

夜風がゆらす、草木がこすれる音が聞こえない

目の前の、怪物のうなり声が聞こえない

心臓の音が聞こえない

コウモリ男の牙が迫る

遅い もうちょっと近くに来い

よだれが玉となって落ちてくるのが見えた

牙が鼻の先まで来た

完全に俺の剣の間合い

すべてがスローモーションの中、俺だけは早い。

後ろに引いた右足を勢いよく蹴りだし、左足を軸に身体を左回転させ、遠心力を

すべて剣に乗せ、突き出たコウモリ男の首へと振り下ろす。

剣は何の手ごたえも無く首を抜け切り、地面に胴体が落ちると同

時に血が噴き出し、  
首はその勢いでゴロゴロと草っぱらを駆け抜けていった。

しばらく死体が動かないか確認した後、ゆっくりと剣を鞘に納める。ふう、と息を吐くと

サワサワとした心地よい夜風が頬をなでているのに気づく。

ガーネット流を修めてから2、3度こういう事があった。

命がかかったギリギリの場面で集中力が極限まで高まると、自分の周りがゆっくりとなる感覚。

エスク爺さんはこれが自在に出来ると言っていた。いつか自分も出来る日が来るのかどうか。

物思いにふけるのは後回しにして、これをどうするかだ。まずこんな魔物が居ることを

ギルドに知らせた方がいいだろう。ここは冒険者の他に一般の人が通る道でもある。

そういえば、青コウモリの姿が見えない。さんざん人の体を齧っていたが、コウモリ男がやられて逃げ出したのか。相手をするのも面倒なので助かった。

噛まれたところはすでに血が止まっており、しびれも無いので放置しても大丈夫だろう。

殴られた頭も少しクラクラするがしばらくすれば治るだろう。両腕にはあざが出来ていたが骨に異常は無かった。

「あー、もうダメ。疲れた。寝る。おやすみなさい！」

木に寄りかかり、すぐさま泥の様に眠った。

夜盗や狼の事は疲れて少しも思い浮かばなかった。

コウモリ男（後書き）

おまたせしました。

次の次位には人とたたかわせてみたいです。

相変わらず花がないですね

次回はエーリさん出しましょう

**実験隊（前書き）**

お待たせしました

## 実験隊

エスケンス王国 首都オズマン 魔法研究施設クジャクの塔 副主任室 深夜

「領主様。実験体の件で報告がございます」

「イツァーリ、私は今、マードブル領の領主ではなく、大規模魔法研究の副主任だ。呼び方に気をつけてくれ」

「・・・失礼を。セウス副主任殿」

薄暗く、決して広くない一室に、壁からにじみ出るように白髪の老人が出現した。

セウスは手にしていた羽ペン先の先を布でぬぐい、ペン立てにしめると苦笑いを浮かべる。

「イツァーリよ、毎回幽霊のように突然現れるのは心の臓に悪いぞ。せめて姿を現わしてから話しかけてくれ」

「お許しを。隠密行動が私の唯一の能力ですので」

「分かっている。言ってみただけだ。それで、報告とは」

「はっ、マトリヨカの神官と共同開発した実験体の内、二体の死亡が確認されました」

「存外早かったな。やはり寿命の短さが大きな欠点か。もう7日ほど持つかと思っていたが」

イツアーリと呼ばれた老人は枯れ木のようにやせ細った腕をローブの袖から出し、  
セウスの机に一枚の羊皮紙を置いた。

そこにはヨウイチ・サキの文字と、似顔絵が描かれており、ガールフの牙の売却と、  
ビルマ洞窟での採取任務に就いた事が書かれている。

備考欄には出自不明と書かれており、空白が目立つ。  
セウスはそれを見て一瞬目を見張るが、すぐに納得したように大きくうなずき、イツアーリに説明を促すように目で催促した。

「ここから南南西に伸びる街道に放った強化型ガールフは一撃で首を真つ二つ。他には傷一つなく、魔法を使用した形跡もありませんでした。ビルマ洞窟のマンキメラも首を一撃で真つ二つ。  
こちらには腹部と顎にわずかな打撃痕がありました。魔法による攻撃はありません。

どちらも、このヨウイチ・サキという冒険者で間違いないかと。  
・あれは単独で撃破出来る  
のは最低でもランク3以上の者が、軍の将校クラスでないと難しい筈なのですが、

この者はランク1、つい最近冒険者になったばかりだそうで」

「ふむ。偶然にも、私は今朝、彼に会ったよ。大魔法をなんなく防いだのをこの目で見たが、  
どうやら剣技も相当なものみたいだな。ガーウルフとマンキメラは魔法抵抗を優先して上げたもの  
だが、それでも白兵戦のみで対抗するのは至難の業なはず・・・いや、彼が常軌を逸した強さな  
だけか。二体の実地データは採取済みなのだろう？」

「はい。、細胞崩壊するので処分には困りませんが、早々と葬って頂き助かりました。しかし、魔法  
がきかぬ上に実験体を一撃で屠る剣技ですか。もし、計画の妨げになるようであれば、私自ら  
処分に参りますが」

「なに、どちらも偶然彼が居合わせたただけだろう。気づく要素は皆無に等しい。

国や軍の諜報ですら尻尾も掴めていない。それを一介の冒険者が気付く訳が無い。

心配し過ぎだ、イツァーリ」

「はっ。ではヨウイチ・サキは来歴の調査のみを行います」

「で、生産はどのくらいまで進んでいる？」

「あまり芳しくありません。強化魔獣は60体、マンキメラは3種で20体程です。  
マンキメラは50体まで増やしましたが、安定せずに20まで減りました」

「そうか。そう何もかもうまくはいかないか。資金は水石でぼろも  
うけている向こうが

負担してくれているが、研究者の不足はいかんともしがたいな」

「水の王の催促も、ルマンデがのりくらりとかわしていますが、  
そろそろなんらかの

成果を見せた方がよろしいかと」

「考えておく。御苦労であった」

イツァーリと呼ばれる老人はロープをはためかせ、セウスのすぐ  
脇の壁に飛び込むと、

水面が揺れるように壁がたわむ。わずかに白い光りを放ち、老人の  
姿は忽然と消えた。

セウスは老人が消えた壁をしばし眺めた後、静かに羽ペンを取り、  
インクをつけて

書類仕事を再開した。

## 実験隊（後書き）

陰謀や策略は好きなのですが  
自分はバカです

そういうの期待されると

困っちゃいますので

あしからず

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0938w/>

---

何も悪い事してないのに天罰喰らった

2011年10月12日11時54分発行